ISSN 2187-1833

京都市学校歴史博物館研究紀要

第７号

目　次

『研究紀要』第７号の発刊に当たって　萩原　裕司　(1)

講演録　幕末維新期の京都と教育　小林　丈広　(3)

資料紹介　京都市における戦後社会科の副読本　小森　千賀子　(15)

研究ノート　学校歴史資料の目録と分類　補遺　和崎　光太郎　(29)

研究ノート　西山翠嶂作品のひとつの特徴について
――古画学習の観点から――　森　光彦　(35)

報告と課題　団体見学の実績と課題――平成二十九年度を振り返って――
野中　哲也　菅野　泰敏　(45)

平成 30 (2018) 年 12 月

京都市学校歴史博物館

研究紀要第七号の発刊に当たって

京都市学校歴史博物館は、平成一〇年一一月に開館して以来、明治二年に日本で最初に六四の学区制番組小学校を創設した日本の近代学校教育の発祥の地である京都の教育の歴史と、学校の創設・経営に尽くされた町衆の情熱を、数多くの学校文化財や歴史資料によって明らかにし、後世に伝えるとともに、市民の生涯学習や子どもたちの学習活動の寄与に積極的に取り組み今年二十周年を迎えた。

この間、入館者数も開館当初は一万人程度であったものが順調に推移し、ここ五年程は二万人を超え、平成二九年六月には累計入館者数三〇万人を達成した。余談ながら、三〇万人達成時には、ささやかながら記念のセレモニーを実施し、当館の上村淳之館長自ら三〇万人目の方に記念品を手渡していただいた。

このように入館者数が順調に推移しているのは、和崎・森の両学芸員が博物館の基本である魅力ある企画展・特別展を企画・開催しているからであり、それを支える職員一同が魅力ある博物館づくりを目標に思いを一つにして、日々の業務を遂行しているのが大きな要因であるのは言を俟たないであろう。

この研究紀要第七号もそうした職員の思いが詰まった一冊であると自負するものである。

先ずは、昨年七月九日、同志社大学教授の小林丈広先生にご講演いただいた「幕末維新期の京都と教育」を掲載させていただいた。これは、七月一日から九月二五日まで開催された「京都番組小学校史入門」の関連講演として開催されたものであり、当日は真夏の暑さにも関わらず、一三〇名の参加者があり大変盛況な講演会となった。番組小学校開設前夜の激動の京都を具体的な資料を交えての説明や、当館では馴染の熊谷直孝にまつわる話など大変興味の持てる講演であった。小林先生にはご多忙の中講演をお引き受けいただき、この場をお借りして改めて厚くお礼申しあげたい。

次に、元市立学校教員の小森千賀子先生の資料紹介「京都市における戦後社会科の副読本」である。京都市社会科教育研究会によって作成された副読本「わたしたちの京都」（「京都のくらし」）の所蔵実態や変遷について丁寧に詳しく紹介いただいている。「…史料の破棄を食い止めるには、具体的な手立てが必要であることを痛感する所である。（中略）貴重な資料が、日々処分されてしまう危機的実態については、この価値を研究者と学校現場が共有しない限りは、歯止めをかける事はできない。」、まさに当館の最大の課題である。

また、校長経験者である、野中主事と菅野主事からは、平成二十九年度を振り返っての「団体見学の実績と課題」。多くの方に来館していただくために、現在毎年来館していただいている学校からの情報発信が大きな力となること、またＰＴＡ等への働きかけを強めることが大切であることを提案されている。

さて、平成三十一年には番組小学校創設一五〇周年という記念すべき大きな節目を迎える。特別展や記念イベント等を開催して広く市民への周知を図り、明治時代の先人の教育に対する期待や熱意、京都が誇る学校教育の軌跡を広く情報発信していきたいと考えている。

最後に、開館二〇周年、明治一五〇年記念事業に向けての多忙もあり今号の発行が例年に比べ大幅に遅れたことをお詫び申し上げるとともに、今号が今後の博物館での教育活動に少しでも寄与出来れば、幸甚の至りである。

京都市学校歴史博物館事務局長　萩原　裕司

幕末維新期の京都と教育

小林 丈広

はじめに

小林丈広と申します。現在は同志社大学に勤めておりますが、以前、京都市歴史資料館におりましたので、その時にお世話になった方も会場にはいらっしゃいます。堅苦しい話にならないようにしたいと思いますので、気楽にお聞きいただければと思います。九州の方は集中豪雨でたいへんな被害が出ているようですので、今日も天気を心配していたのですが、小雨はぱらついていますが、あまりひどい雨にならなくて良かったと思っております。それでは一時間半ほどお付合いいただければと思います。よろしくお願いいたします。

先週か先々週だったでしょうか。ＮＨＫで「新日本風土記」という番組がありまして、「京都青春物語」という特集をやっていましたが、ご覧になった方はいらっしゃるでしょうか。何人かいらっしゃいますね。今日の話とはとくに関係はないのですけれども、今年の初め頃に私もこの番組の関係者の方と一度雑談をさせていただいたんですが、どのような番組になったか楽しみに拝見しておりました。そうしますと、京都大学の学生寮とか、同志社大学で同僚だった方などがたいへん長く扱われていました。どちらかというと、京都の高等教育の自由な雰囲気にスポットをあてた番組と言って良いと思います。たいへん楽しく拝見させていただきました。とくに、学生寮の中まで入って撮影し、寮の自治というところに注目していたところなど、興味深く拝見いたしました。

そうした高等教育の自由とか自治といったテーマ、それはそれでたいへん大切なのですが、本日のこの講演は、京都市学校歴史博物館の企画展「京都番組小学校史入門」の関連講演会ということですので、むしろ教育の基礎の部分である初等教育の、しかも公教育としての子どもたちの教育の始まりについて考えてみたいと思います。

この公教育としての小学校教育の始まりといいますのは、この学校歴史博物館のメインテーマでもあって、この博物館の常設展でも詳しく触れられていると思いますが、日本の歴史の中でもたいへん大事なことだと思っております。しかも、私が現在職場としているのは私立の大学なのですが、私学には私学の特徴があって良いと思いますが、そうした私学教育にとっても参照軸となるような、公教育として子どもたち向けの教育がどのように進められてきたかというところが、やはり教育を考える上ではもっとも重要なのではないかと思っております。先ほどの番組が、京都の高等教育ということで、自由と自治に焦点があてられていたことに対して、あえて比較をすれば、公教育としての子どもたち向けの教育は、先ず第一に平等とか公平ということが重視されるべきでしょうし、その上での自治というあたりに注目をしながら考えてみたいと思っております。

そこで、私も今日は少し早めに参りまして、今回の企画展を興味深く拝見いたしました。学区ごとに作成された町々の絵図などがたくさん展示されており、それぞれの所蔵先なども確認しながら、勉強させていただきました。今日の話がこの企画展にどのように関わるか不安なところもあるのですが、先ほど述べた高等教育で取り上げられた教育の姿というのは、どちらかというと文明開化や近代化によって大きく変わってきた教育の姿ということができるとしましたら、それに対して今日の私の話は、むしろ江戸時代からの連続性の中で京都の小学校教育のスタートというものを考え

ることになるのではないかとも感じております。最初に、準備してきました画像を見ていただきながら、話を進めていきたいと思います。京都市内を中心に点在する石碑や史跡などの写真をいくつか見ていきたいと思います。（小文では、講演録という性格上、当日紹介した画像の多くを省略させて頂きました。したがって、画像がないとわかりにくい話題も大幅に割愛させて頂いたことをお断りします。その代わり、江戸時代の学問や教育などについて説明を補足しましたので、講演当日よりも詳しくなっている部分もあります。ご了解下さい）

まず最初にいくつかの画像を見ていただきます（小文では画像は割愛しました）。上京区の室町通から少し西に入ったところに「皆川淇園弘道館址」という石標が建っています。江戸時代の、十八世紀から十九世紀初めにかけて活躍した皆川淇園という町人学者がこの辺りで弘道館という私塾を開いていたという故事にちなんで建てられた石標です。最初にこの石標を紹介したのは、弘道館は淇園晩年の試みということであまり長続きはしなかったのですが、町人の手による身分を超えた教育機関設立の試みということもでき、現在の小学校教育の京都における発祥のひとつと考えることもできるのではないかと考えたからです。あまり人目をひかないのですが、このような石標は市内あちこちにあります。次の石標も弘道館址に近いのですが、春日潜庵という幕末の学者がこの辺りに住んでいたことを示す邸宅跡の石標です。

次に紹介しますのは中京区ですが、現在まで医家として続いているお宅です。究理堂跡の説明板が写っています。比較的新しく作られたものですが、このお宅では現在まで究理堂ゆかりの記録や文書などを守り伝えておられます。実は、京都市歴史資料館にいたときに、このお宅の史料を借用して展示させていただいたこともあります。たとえば、「処治録」という、江戸時代のカルテなども残っております。「処治録」には患者の名前も書かれていまして、頼山陽のものもあります。処方や薬は漢方ですので、なかなか解読は難しいのですが、このような医学的知識を学び合うネットワークも存在していたということです。ちなみに、頼山陽の居宅跡も「山紫水明処」という名称で今日まで受け継がれています。

そうした医学的知識のネットワークを示すものとして、解剖図の拡がりにも注目したいと思います。一般的に江戸時代といえば、人体の解剖が如何に困難だったかとか、洋学者が厳しく弾圧されたとか、解剖がほとんど行われなかったということだけが強調されている傾向がありますが、実は江戸時代の京都には数多くの解剖図が出回っていたようです。究理堂にも解剖図がいくつも残っていますが、医家ではない学者の家にも解剖図が伝わっていることがあります。また、解剖図を描くためには、画家との交流も必要になってきます。究理堂には動植物を描いた貼交屏風も残っており、本草学者や写実的な画家などとのネットワークがあったこともうかがえます。解剖をはじめとする人体内部への探求が明治維新以後に本格化したのは事実だと思いますが、ここでは、江戸時代にも多くの解剖図が流布していたことを確認しておきたいと思います。

また、動植物図の屏風の中には海外の珍しい動植物が描かれたものもありました。海外の知識が京都の富裕な町人を中心に浸透していたことが想像できます。京都で動植物の知識、現在の言葉で言えば博物学でしょうか、当時の言葉で言えば本草学の拠点となっていたのが山本亡羊で知られる山本読書室です。山本読書室は今でも江戸時代の雰囲気を残した屋敷に、多量の記録や文書、あるいは動植物を描いた画帳を伝えています。このお宅の史料も以前お借りして展示させていただいたことがありますが、初めてこのお宅の史料を閲覧させていただいたときの感銘は忘れられません。少なくとも、江戸時代の人々が明治維新以降の人々よりも教養の面で遅れた人々だとはいえないということを実感させられました。

究理堂や山本読書室のようなお宅は、通常の家持町人と比べてとくに裕福というわけではなかったと思いますので、普通の町人学者といって良いと思いますが、そうしたお宅が今でも家として存続して、記録類を守り伝えているというのが京都らしいといえるかもしれません。究理堂や山本読

書室には、公家や武家なども出入りし、時には公家や武家の方が当主に師事して学んでいました。いわば、身分を超えた付き合いがあったのですが、こうした私塾や寺子屋が京都市中の至る所にあり、相互に交流しあっていたのが、近世後期から幕末の社会だったのではないかと思います。

次に、このような京都の状況が、日本全体からみるとどうだったかについて考えてみたいと思います。

まず、現在の岡山県にある、たいへん著名な学校ですが、閑谷学校を紹介します。閑谷学校は、たいへん開明的な大名が、武家に対する教育に力を入れていた他の大名たちとは異なり、庶民に向けて学校を開いていった事例として知られているものです。この事例は、大名の開明的な試みを高く評価するという文脈で語られることが多いと思います。そういう営みとしてよく知られている学校です。現在も学校全体が保存され、地域の社会教育の場としても活用されているようです。いわば、「名君」とか「仁政」というものを体現することができる場となっているといえるかもしれません。

これについては、後ほどの話と少し関わってくるのですが、大名によって統治されている地域、薩摩藩や長州藩もその例ですが、そうした地域では「名君」による「仁政」の物語が数多く作られてきました。言い換えると、そうした地域では、「名君」の登場を待望する意識が根強く存在していたということができるかもしれません。水戸黄門などはその代表的な物語です。時代劇になじんでいる方の中には、江戸時代の庶民は皆そのような意識だったのではないかと考えている方もおられるかもしれません。ただ、江戸時代でも大名が統治していない地域は相当に広く存在していました。後ほど、そうした話をしてみたいと思います。

ただ、閑谷学校がたいへん画期的な試みであったことは事実です。岡山では、学校を武士だけのものにとどめておかずに、庶民にまで開いていこうという教育が、しかも江戸時代の早い時期に試みられたというのは、やはり歴史的に見てたいへん重要な出来事だったと思います。

ところで江戸時代も後半、さらには幕末になると、全国各地で、京都と同じように、町人や農民、庶民同士が学ぶ場所が出来てきました。町人同士、農民同士がネットワークを作って学び合う。新しい知識をお互いに交流し合うという学びの場が出来ていきます。

その一例として、但馬の例を紹介します。但馬聖人と呼ばれた池田草庵という人物が営んでいた青谿書院の現在が写っています。建物の外にあるトイレの扉には蝋燭のススの跡がたくさんありました。案内して下さった方のお話では、この私塾に集まっていた学生たちが、寝る間も惜しんで勉強をした名残だそうです。私が見学させていただいているときも、近隣の子どもたちが見学に来ていました。今でも寺子屋のような試みをされているようです。青谿書院は、兵庫県北部の山間部の私塾の例です。

あるいは、今回の集中豪雨でたいへんな被害が出たと報じられている九州の日田にも私塾がありました。広瀬淡窓が営んでいた咸宜園ですが、今では周辺の整備が進められ、観光客にも公開されています。また、広島県の農村部には、菅茶山という、やはり頼山陽などと交流があった人物のお宅が保存されています。古文書も大切に守り伝えられてきました。現在は、広島県立歴史博物館に寄贈され、国の重要文化財となっています。

また、先ほど紹介した閑谷学校とも関わるのですが、岡山県北部の山間部で生まれ育った山田方谷の私塾の跡も県内に残っています。地元では、方谷の事績を顕彰しようという活動が活発に行われ、大河ドラマの主人公にしようという運動もあると聞いています。

このように、町人や農民出身の学者が各地で活躍し、そこで学び合う町人や農民たちの営みが全国で見られるようになっていました。先ほど紹介した日田の広瀬淡窓などは門人三千人と伝えられていますが、同じように支持されていた私塾があちこちにあったと思います。ですから、幕末の京都の学び方というのは、決して特別なものではなかったのですが、京都にはそうした私塾や寺子屋が沢山集まっていたことと、たとえば草庵や方谷のような人もまずは京都に来て学者と交わるなど、京都がネットワークの

中心にあったことも事実でした。京都の教育も、こうした幕末の町人や農民たちの学問のネットワークを核にして成立してきたといえるのではないかと思います。

このような話を少しだけ、これからしていきたいと思いますが、その前に最近発見され、私自身も編集に関わらせていただいた史料集から、ひとつふたつ史料を紹介させていただきたいと思います。

今村家文書と下京三十一番組

図1ですが、この絵図は現在開催中の企画展にも展示されていませんので、ここで紹介したいと思います。下京三十一番組という学区の絵図です。

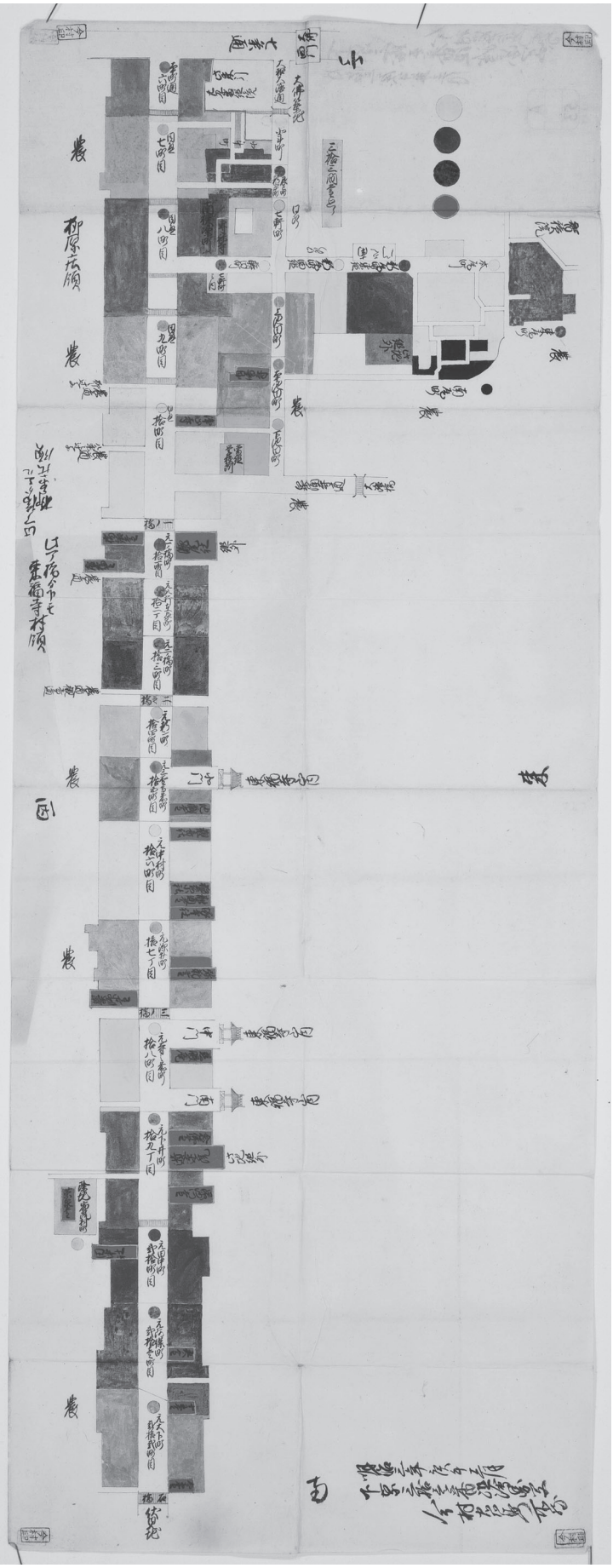


図1　下京三十一番組の学区絵図

七条通を北限にして、本町通に沿って南北に縦長の学区域を持っていたことがわかりますが、絵図の隅には「今村印」と捺印されていました。これは、今でも今村家に伝わる古文書の中から出てきたものですが、明治二年の小学校創設時には、今村忠右衛門（忠次）という人物が添年寄という、学区の責任者の立場にいたことがわかっています。

今村家は、戦国時代から本町通界隈にあって、三好長慶や妙法院などと関係を持ちながら現代まで存続してきましたが、同家には約四百年間の古文書六千点余りが守り伝えられてきました。その中には幕末維新期のものもかなりの数含まれ、それらを読み解いていくと、当時の当主忠右衛門（忠次）が下京三十一番組の小学校創設にたいへん尽力したことがわかります。

今村家文書によって、下京三十一番組小学校ができた頃のことを見てみ

ますと、この学区は縦長のために、小学校創設のために適当な土地がなかったことが悩みだったことがわかります。今村家文書の中に含まれていた「下京三十一番組小学校建営一件留」によれば、「依之早々当組内一同会議仕候上」とあり、適当な土地はなかなかないものの何とか工夫して建設していかなければならないということで相談を続け、「則当組内凡中央之地本町通拾町目辺を以場所取調ひ仕度候ハハ心痛仕候処」と、学区の中央部に近い本町十町目に学校を設けることにしたものの、「若急キ相応之場所も無御座候」とある。すなわち、学区の中心部といえばだいたい本町十町目辺りですが、そのあたりは家が立ち並んでいますし、また北端の住民からも南の住民からも遠いという、縦長の学区域ならではの悩みもありました。もう少し読み進めますと、「猶又右中央見込を以組内四方之道法相計候処、市中トハ相違仕、何分端末与申」とあり、京都市街の中心部とは異なり、市街の端なので、なかなか適当な場所はないというのです。この文書がいつ作られたかというと、明治二巳年二月晦日ですから、下京三十一番組がまさにできた直後の文書で、いよいよ小学校創設に向けて動き出そうという時でした。

また、その経緯をもう少し別の史料で見てみると、次のようなことが書かれています。冒頭部分には、「御一新後京都洛中洛外町続不残番附を以組町ニ被仰付候処」とあり、要するに江戸時代以来の町組を作り直すことになった経緯が書かれています。こうして明治元年には一度町組の作り直しをしたのですが、その結果が中途半端だったということで、「明治二巳年二月右洛中洛外共右番組御改正ニ而御組改被仰出候」と、明治二年はじめに再度作り直すことになったことが記されています。「依之御改正後番組三拾弐ケ町之内、左ニ五ケ町ハ元三拾八番組、拾四ケ町ハ元四拾番組、下モ拾三ケ町者元四拾壱番組」と書かれていることからわかるのは、明治二年に作られた新しい学区の下京三十一番組には三十二の町が含まれることになったが、そのうち五ヶ町は元の三十八番組から、十四ヶ町は元四十番組だったものが、十三ヶ町は元四十一番組が集められて、新しい学区に再編成されたということです。

そこで、本日の資料の方をご確認いただければと思いますが、町組の変遷図（次ページの図2）が入っていると思います。この変遷図は、京都市史編纂所が編纂した『京都の歴史』の第六巻と第七巻に掲載されている地図を組み合わせたものですが、近世の複雑な町組が、二度の町組改正によってシンプルに作り替えられたことがわかると思います。二度目の町組改正によって成立した下京三十一番組はその中の東南角に位置していました。こうして現在の学区につながる地域の枠組みが、わずか二年間程の間に作られました。おそらく、かなり強引に進められた面もあったことから強く反対した住民もいたでしょうし、協力しようとした住民もいたことでしょう。

この下京三十一番組ですが、京都市中の東南角に位置していましたが、新しい町組（学区）が編制されたということは、あらためて市中であることが確認され、小学校設立に向けて動き始めたことを意味します。この地域がなぜ郡部ではなく京都市中に含まれたかといえば、古くから伏見街道に面し市街化が進んでいたからだと思います。この学区が南北に細長い地域であったのも、そのためです。さて、下京三十一番組の真ん中あたりといえば本町十町目周辺ということになります。実際、同町の東側に小学校が設立されました。

今回紹介させて頂いたのは、本町十町目に現在も住まわれている旧家から発見された古文書です。私は、このような古文書が、旧家に大切に保管されているというところが京都らしいなと感じます。この古文書が十数年前に発見されたとき、それに感激した何人かの方が研究会を始め、その整理や撮影を進めました。私も途中からですが、翻刻作業に関わらせていただき、近年ようやくその一部が史料集として刊行されたところです。

町組の再編成が一段落し、学区が成立してからの状況については、もう少しわかりやすい地図がありますので、それを例にとって説明させていただきたいと思います。地図は明倫学区のものです。

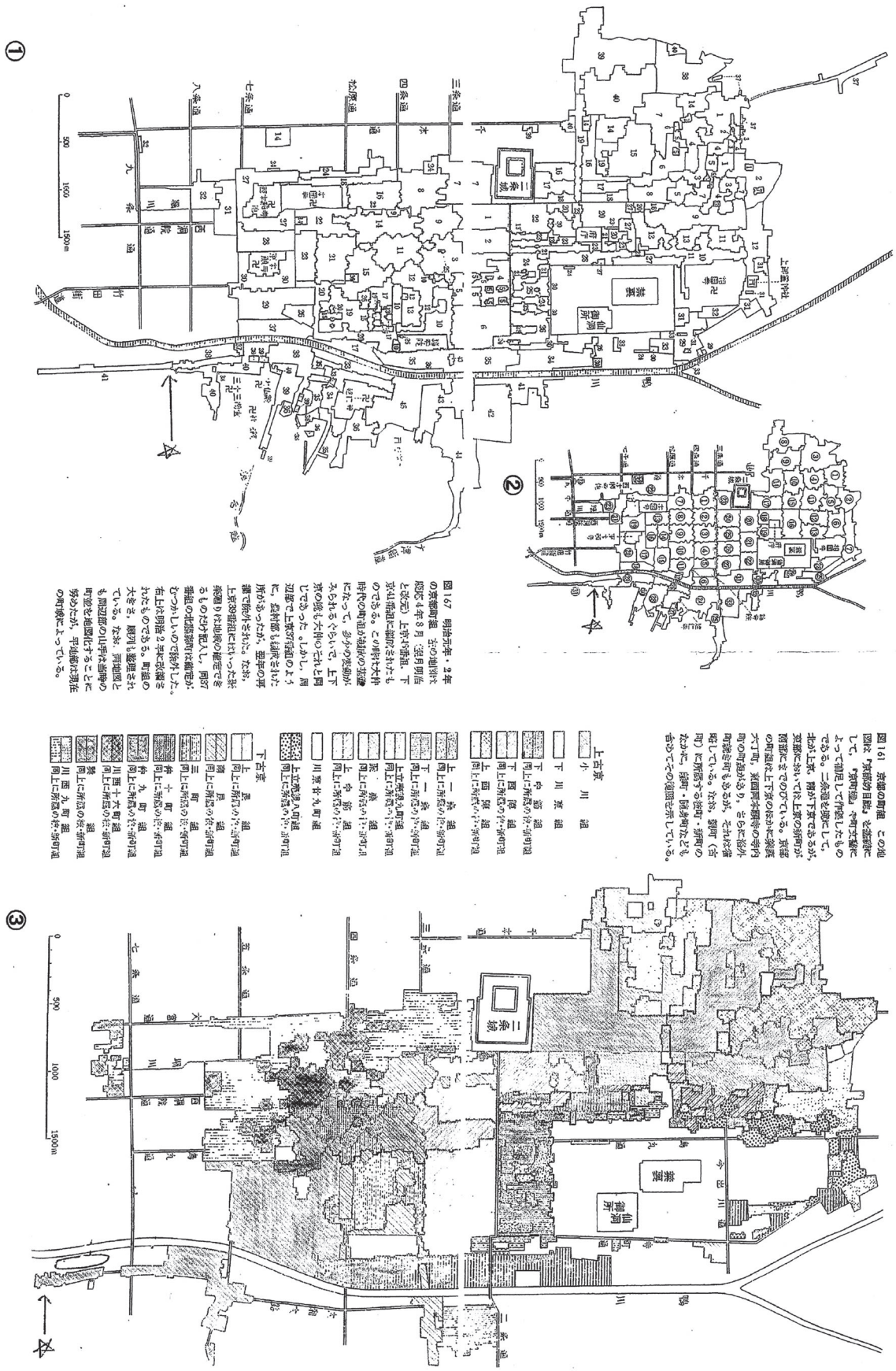


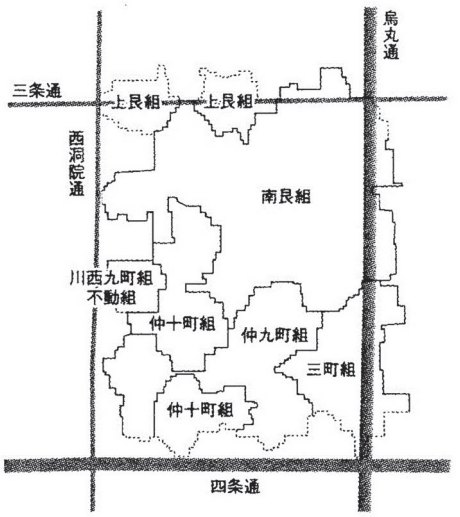
図2　町組変遷図　③が近世の町組、①が明治元年、②が明治２年の町組改正による。

明倫学区を例にとって、江戸時代の町組を示すと図3の①のようでした。町組の形成にはいろいろな経緯や事情があり、複雑に入り組んでいたのです。そこで明治維新を機に町組の整理に取り組んだのですが、いっぺんには進みませんでした。ある程度住民の自主的な再編成に任せたのですが、その結果は②のようなものでした。ある程度整理は進んだのですが、やはり江戸時代の町組の枠組みを大きくは変更できませんでした。そこで、もう少し整理できないかということで、翌二年一月に成立したのが③です。地域の名称は下京三番組となりました。この下京三番組ができた時に、下京三十一番組も成立しました。

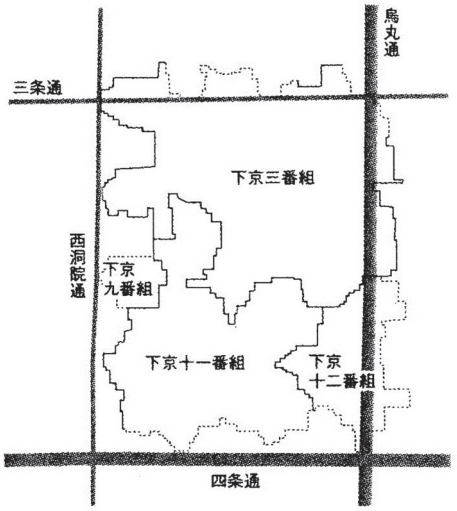
猪飼敬所から見た幕府と京都

少し話は変わりますが、江戸時代の京都の人々の考え方について、ひとつ史料を紹介させていただきたいと思います。これは、西陣生まれの猪飼敬所という町人学者が記したものですが、そこには京都の人々の考え方が象徴的にあらわれているように思います。そこで、幕末維新期の京都を考える前提として、読み解いてみたいと思います。時代は天保期、明治維新より三十年程前ですが、天保の飢饉の際に猪飼敬所がどのように考えたか記されています。

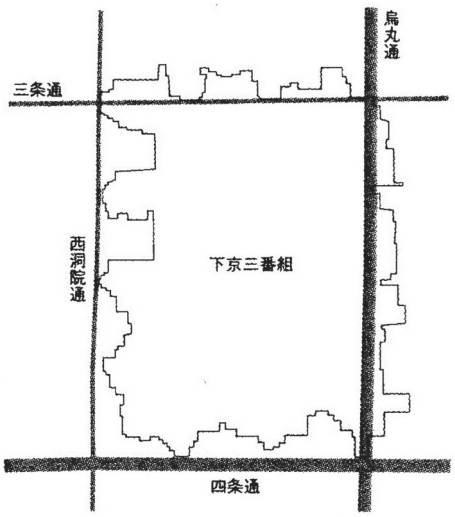
今年〔天保五年〕江戸にも京にも、餓死なきにあらず。京には米価高直にて、家普請少く、日傭之者業を失ひ、西陣織物少く、其下職之失業乞児と成者あり、夫婦離散する者あり。江戸も京も、去冬は施行する者、窮民にあらさる者も、是を受て遊惰す。官より触出て、是を戒む。当春より夏に到り、実に飢餓にも及ふに、京も江戸も、施行する人なし。是御蔭参り報捨と同しく、名聞にて人そはへ〔人戯〕するなりと、何方にても嘲り候。愚意には諸侯は国人を我民とせらるゝ故に、仙台などの飢饉の国も、恵下に及ふ。江戸京なとは、郡県の吏と同しく、如此に行届かさる事あり。其中に江戸は将軍之御膝下故に、去年も今年も上より御救米出つ。是は上意に出るなるへし。是を我民と思召さるゝ故也。京は御救米不出。此は吏たる人、其民にあらされはなり。公儀より諸侯、囲米をせさるやうに、度々号令あり。京にても米価高直に



①近世後期の町組



②第１次町組改正（明治元年）



③第２次町組改正（明治２年）

図３　明倫学区の場合
『京都市政史』第１巻より

不拘、町屋面々普請せよと令せらる。然れとも上下共に各其私を計り、世を救ふの心なき故に、令出るも従はす。余毎に言ふ、伊勢尾張より西は、大抵七八分、西国は豊作、米は不乏、諸国武家かた、米価貴くて、皆勝手宜し。貧民の米価の貴きに困しむを、上之利を分ちて救はゝ難き事なしと。所聞余か推量の如くなり。貴説もおなし。愚意には諸侯之執事之人、若今年諸国、如奥羽凶作なれは、大に困厄也と。是を懼れて米を囲ふなり。各己一分を憂ふるなり。〔中略〕、農民は麦熟すれは食あり、又雑物にても食し、飢餓に及はす。市民之失業者、飢餓に至る。此京江戸繁華の地に飢民ある処なり。平日に無頼之者を容れ置候。其困窮不可不救。〔中略〕我土に住せは、皆民なり。民とせぬ心なれは、初より沙汰して容ましきなり。

かつてよく見られたテレビや芝居などの時代劇では、庶民の立場に立つ「良い」大名や将軍が描かれていました。「名君」による「仁政」をたたえる物語は、悪政に対する不満のはけ口として好まれていました。しかし、京都の町人はもう少し違った考え方を持っていたようです。考えてみれば、京都や大坂というのは殿様のいない町、「名君」を期待できない町だったのです。

史料に沿って読み解いていきます。「今年江戸にも京にも、餓死なきにあらず」とあります。書き出しの「今年」は天保五年のことだと思います。前年からの飢饉の影響で江戸でも京都でも餓死者がいないわけではないといいます。「京には米価高直にて、家普請少く、日傭之者業を失ひ、西陣織物少く、其下職之失業乞児と成者あり」。飢饉のために、物乞いをするほど生活に困窮する人々も多い。そのために夫婦別れするものもいるという。そんな悲惨な状況が書かれています。「江戸も京も、去冬は施行する者、窮民にあらさる者も、是を受て遊惰す。官より触出て、是を戒む」。飢饉が始まってから、職人や小商人は高騰した米を購入することができず、食べるものがなく困っている。それを見た裕福な商人らは助け合いとして施行を行おうとしたのですが、幕府はそれに対して、困っていない人まで施しを受けて怠けてしまうからといって取り締まったというのです。現在でも政府や官僚が言いそうなことですが、幕府が町人をどう見ていたかうかがえるような気がします。「是を受て遊惰す」というところです。

こうして見ると、今年の春から夏にかけて、飢饉がますますひどくなっているにもかかわらず、京都でも江戸でも助け合いをしにくい状況が生まれていた。ただ、猪飼敬所はそうした商人の動きに対しても厳しい目を向けます。「是御蔭参り報捨と同しく、名聞にて人そはへ〔人戯〕するなりと」とあるのは、施行というのも伊勢参りの流行と同じで、皆がするからするけれども、皆がしなくなればしないという、主体性のないものだから続かないと、町人の姿勢というか、意識に対しても皮肉を込めて批判の目を向けています。問題はその次です。傍線部のところですが、「愚意には諸侯は国人を我民とせらるゝ故に、仙台なとの飢饉の国も、恵下に及ふ。江戸京なとは、郡県の吏と同しく、如此に行届かさる事あり」と書かれています。

さてこの部分ですが、少し説明をしながら、考えてみたいと思います。「諸侯」とあるのは、大名のことです。大名はその国の民、たとえば島津だったら薩摩や鹿児島の民、伊達だったら東北の仙台周辺の民のことです。そうした城下町の住民は、大名自身の民すなわち「我民」と考えているといいます。仙台などは冷害が直撃し、飢饉の影響がもっとも大きい地域です。にもかかわらず、その仙台でも恵みが下々にまで及んでいるのは、大名がその地域の住民を「我民」と考えているからだというのです。先ほど申しましたように、「名君」による「仁政」に対する期待感です。それでは、「江戸京なとは、郡県の吏と同しく、如此に行届かさる事あり」とはどういうことでしょうか。江戸や京都はご承知のように、幕府が支配する天領です。京都は典型的ですが、そういった町には大名はいません。それでは誰が支配しているかというと、京都所司代や京都町奉行がそれにあたるのでしょう。ただこうした役職に就く人々は三年から五年程度勤めると他の役に就くために京都を去って行きます。つまり寺社奉行や大坂城代を無事勤める

と京都所司代になり、所司代を無事勤めると老中になるというように、国家官僚として各地を転々としながら出世していく。だから、自分の出世のことは考えていても、京都の庶民生活については詳しくないし、関心もないという、これは京都生まれの町人学者猪飼敬所による痛烈な幕府批判です。

別の資料には、次のようなことも記されています。

「夜前門人両三輩来り盃酒之上語り候」。天保九年のものと思われる手紙ですが、書き出しには、友達同士でお酒を酌み交わしながら話したことだけれどもとあります。以下、内容をかいつまんで紹介します。京都寺町の鳩居堂（香具屋久右衛門）は、数年前から救荒に心を尽しているが、とくに一昨年から昨年にかけて京都と京都近郊の困窮者を救済したのは「殊勝」である。しかし、一人の力では到底救済が行き届くわけではなく、結局餓死してしまった者も多かった。そこで、亡くなった人々のためにある寺で「大法事」を行い、その顛末を記した石碑を建てて残そうとした。ところが、幕府はそのような碑を建てることを認めようとしなかったというのです。

夫故ハ京奉行所より関東ヘハ御仁政ニ而京地一人モ餓死無之と申上られ候、これニ差支レバ也

つまり京都町奉行などは、この飢饉の際にも京都では餓死者が出ていないなどと、事実を覆い隠すような報告をしており、碑などを建ててしまっては、そうした報告と矛盾してしまうというのです。結局、京都では七～八万人も餓死してしまったのではないかといいます。また、さらに次のような一節もあります。

然ルヲ困窮ノ時ニ、官ヨリ命シシテ祇園ノねり物ヲさせ、京ハ困窮せぬ様ニ上へ申上て、我役前ヲツクロヒ、下ノ困窮ヲ上へ蔽ハルル事、扨々不忠ノ至ナリ、然レトモ独京有司ノ咎ニアラス、関東ノ大政皆然リ

つまり町奉行所はそういう法要を営むとか、あるいは石碑を建てるのも認めないというだけではなく、祇園祭が中止になると京都の町人が生活に困っていることがわかってしまうので、祇園祭も行うように求めているのです。この資料も猪飼が記したものですが、明治維新より三十年前の京都には、すでに幕府の政治をかなり冷めた目で観察していた人がいたのです。ここでは、そうした救済活動のリーダーの一人として、香具屋久右衛門の名があがっていることに注目したいと思います。

香具屋久右衛門の活動

ここで登場する香具屋久右衛門は、天保期に鳩居堂の当主だった熊谷直恭のことです。直恭は、飢饉の際に三条河原に救い小屋を建てて困窮者を救済したことで知られていますが、それ以外にも、大文字送り火の支援をしたり、種痘を普及したりしたといわれています。安政期になると日本にコレラが上陸しますが、直恭はコレラにかかった患者らの救済に携わったために、自ら罹患し亡くなったと伝えられています。

熊谷直恭が亡くなった後、鳩居堂を継承したのが、熊谷直孝です。これ以降明治初年までの間、香具屋久右衛門といえば、直孝のことです。

社会的活動を積極的に展開したことで知られる熊谷直恭の後を継いだ直孝は、直恭の活動を受け継ぐと同時に、直恭以上に政治にも関心を示しました。安政期といえば、アメリカとの通商条約締結をめぐり、幕府と朝廷との対立が深まり、条約締結に反対する水戸藩や公家らの活動も盛んになりました。それにより、上洛した老中堀田正睦が朝廷から許可を得ることに失敗し、失脚します。そうした水戸藩や朝廷の動きに対し、幕府は井伊直弼を大老に就け、事態の打開を図りました。直弼が水戸藩などに連なる志士らを弾圧したことは、安政の大獄と呼ばれ、よく知られています。京都でも公家の家臣や学者など多くの人々が連座しました。そうした時代状

況でしたので、おそらく鳩居堂も志士らが集う拠点のひとつになっていたのではないかと思います。直恭と親しかった頼山陽の子三樹三郎が大獄に連座して処刑されていますので、直孝にとっても人ごとではなかったのではないかと思います。

井伊直弼は、朝廷や諸大名の干渉を抑えて、幕府の立て直しを図りますがかえって桜田門外で暗殺され、以後志士らの活動は一層激しくなりました。

しかし、たとえばアメリカとの条約締結には反対していた孝明天皇も、幕府と対立しようとか、幕府に代わって政治を行おうとは考えていませんでしたから、和宮降嫁などを通じて幕府との融和を図りました。ただ、志士らはそうした朝廷の動きにも反発し、幕府寄りとみなした学者や貿易によって利益を得た商人などを「天誅」と称して暗殺を繰り返しました。そこで、孝明天皇らは、会津藩や薩摩藩の力をかりて志士を支援する公家や長州藩の影響を朝廷から排除しようとします。これが文久三年八月十八日のクーデターと呼ばれるものです。

尊王攘夷派の公家や長州藩は、いったん西国に退きましたが、翌年には京都での復権を目指して軍を率いて上洛を目指します。そこで起こったのが、会津・薩摩など御所を守る諸藩と長州勢との戦闘で、蛤門などが戦場になったことから禁門の変と呼ばれています。禁門の変は、幕末を描いたドラマなどでは必ずといっていいほど描かれる大事件ですが、京都にとってはどんどん焼けと呼ばれる大火の原因になったことで知られています。北風の中で戦闘が繰り広げられ、大砲や鉄砲が公家屋敷や藩邸、町家などにも打ち込まれたことから、火は蛤門のあたりから南に燃え広がり、京都市中の中心部を焼き尽くす大火事となりました。鳩居堂ももちろん焼けましたが、東本願寺をはじめ、多くの寺社や祇園祭に関わる町々も被災しました。

現在私が所属している同志社大学の創立者で新島襄とその妻八重については、数年前に「八重の桜」という大河ドラマで紹介されましたが、その中でも禁門の変は大きく取り上げられていました。会津藩などがどんどん大砲を打ち込むと、長州勢が敗走するというストーリーになっていましたので、大火の原因も会津の大砲だったと描かれています。そこで、焼け出された町人らは、会津藩士の山本覚馬（八重の兄）に対して恨みを抱き、被災した子どもたちが覚馬に石を投げつけるという場面もありました。それに対して、割って入ったのが松方弘樹演じる大垣屋清八です。大垣屋は京都に駐留していた会津藩に物資を調達する御用商人でしたので、覚馬とも親しく、また京都の町人にも影響力がありました。

ドラマの中では、大垣屋が被災者に対する救済活動の指揮を取っているように描かれています。天保の飢饉の際の熊谷直恭はおそらくこうした役割を果たしていたのではないかと思います。ドラマには出てきませんが、どんどん焼けの際にも、実際には熊谷直孝などがこうした活動をしていたのではないかと思います。

さて、さきほど貿易によって利益を得た商人が「天誅」の対象になったと申しました。井伊大老の時代に欧米列強との条約が結ばれ貿易が始まると、生糸や茶が主要な輸出品となり、開港場が賑わったといわれます。貿易は、一部の商人に巨利をもたらしました。その一方、たとえば生糸が高値で輸出されるようになると、国内では生糸が不足し、西陣織の生産者などは生糸を入手できなくなります。西陣織ができなくなると、職人らは仕事がなくなり、失業状態となります。また、生糸などの値上がりは、米など生活必需品の高騰にもつながり、収入がなくなった職人の暮らしを直撃しました。貿易が始まる前には一石あたり八十匁程だった米の値段が、貿易が始まると二百匁程に、さらに大火に見舞われた京都ではますます物価の高騰が続き、慶応年間には千匁以上にまでなったといわれています。数年間で米の値段は十数倍になったことになります。これでは、米を買って暮らしている人々は生活できません。そこで、再び救済活動が行われることになります。また、こうした時勢に、暴利を貪っているとみなされた貿易商人、たとえば生糸商人などが「天誅」の対象になりました。

慶応の救済活動については、『仁風集覧』という記録が残っていますので、どれだけ多くの人々が、救済のために金穀を提供したか詳しくわかります。それを見ると、三井家、小野家、島田家というような幕末京都を代表する富裕な商人たちはこぞって寄付をしていますが、こうした人々の前に名前を記されているのが、香具屋久右衛門でした。熊谷直孝のことです。金穀の額は三井家などよりも少ないので、それらより先に記されているというのは、救済活動の中心を担っていたからではないかと推測されます。

『仁風集覧』が貴重なのは、金穀拠出者の名前だけでなく、住所も記されていることです。そこで、この資料を読み解いていくことで、救済活動に協力した町人らが、京都市中のどのあたりに居住していたかを知ることができます。図4はそれを地図に落としたものですが、金穀拠出者がどのあたりに多いか一目瞭然かと思います。西陣や祇園などにも多くの拠出者がいました。しかし、何といっても三条通あたりから五条通にかけて、烏丸通から西洞院通にはさまれた地域に多くの拠出者が集まっています。京都でももっとも裕福な地域、呉服商や染物まで兼ねた悉皆商、両替商などが集まっているのがこの地域です。室町商人という言葉もありますが、室町通や新町通には祇園祭の際に立派な山鉾を出す町が並んでいます。それだけ、町にも財力があったということだと思います。これらの地域の中心に、のちの明倫学区もありました。のちに明倫学区となる地域には数多くの拠出者がいました。ちなみに、これらの地域は数年前のどんどん焼けで家は全焼していたはずです。したがって、まだまだ大火から復興の途上にあったと思いますが、それでもこれだけの寄付をしていたということです。

飢饉や災害等の時に、町人同士が助け合うというのは、江戸時代の中頃から京都の町人社会で広く行われ、幕末にはこのように定着していたことがわかります。こうした助け合いは、近代の市民社会にもつながるもので、江戸時代の底流で武士による支配を必要とせず、町人を主体とする社会を準備するものともいえると思います。その意味で、猪飼敬所の思想とも相通じるものでした。猪飼が香具屋久右衛門の活動を高く評価していた理由もよくわかります。

以上、幕末に熊谷直孝が果たした役割の一端をご紹介してきました。この熊谷こそ、明治二年に日本で最初の小学校制度が京都で創設するにあたり、率先して私有地を学校の敷地として提供し、学校の運営にもあたった人物でした。熊谷が創設したのが、のちの柳池校です。また、これも日本で最初の博覧会といわれる京都博覧会の開設についても、熊谷は京都府と民間商工業者の橋渡し役として世話役をつとめました。

こうした熊谷のような有力町人の事績については、まだまだ話し足りないのですが、大切なのは、こうした人物が登場する背景には、京都市中に根付いていた寺子屋や私塾の活動、町人自らの手による公共的事業、社会

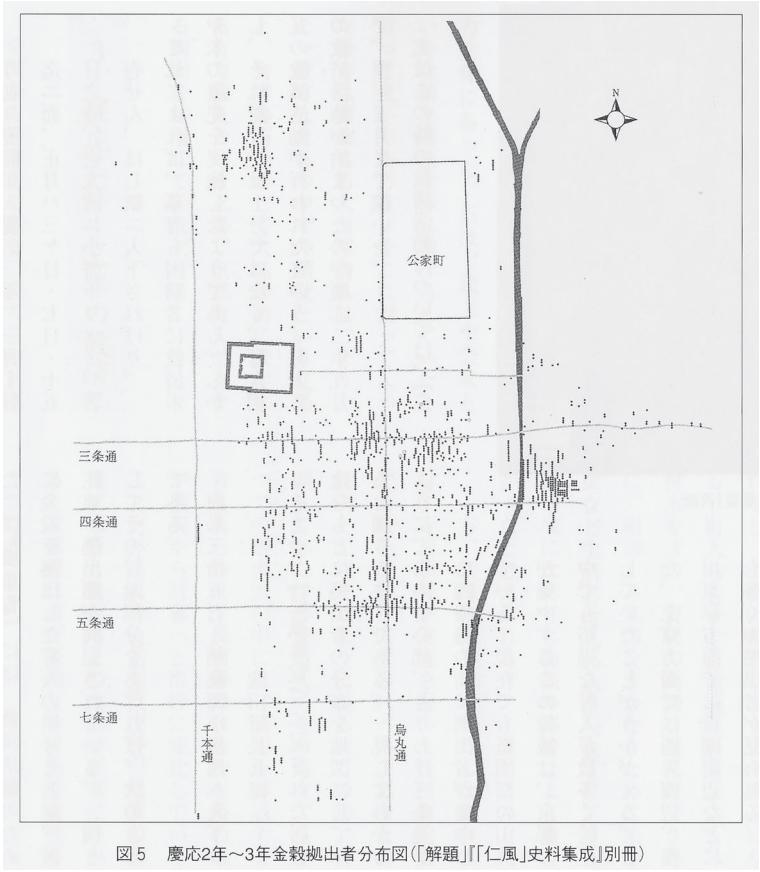


図5　慶応2年～3年金穀拠出者分布図（「解題」『「仁風」史料集成』別冊）

図4　『仁風集覧』による金穀拠出者

活動の経験などがあったということです。本企画展を見るにあたっても、江戸時代以来の町人社会のあり方というものに想像をめぐらせていただければと思います。小学校の話はこれからですが、時間が参りました。ご静聴いただき有り難うございました。

参考文献

今村家文書研究会編『今村家文書史料集』全二巻、思文閣出版、二〇一五年
京都市編『京都の歴史』第六～七巻、学芸書林、一九七三～一九七四年
京都市市政史編さん委員会編『京都市政史』第一巻、京都市、二〇〇九年
小林丈広『明治維新と京都』臨川書店、一九九八年
小林丈広監修『「仁風」史料集成』全四巻、近現代資料刊行会、二〇一六年
小林昌代『京都の学校社会史』プランニングR、二〇一四年
辻ミチ子『転生の都市・京都』阿吽社、一九九九年
明治維新史学会編『明治維新と思想・社会』有志舎、二〇一六年

京都市における戦後社会科の副読本

小森　千賀子

一、はじめに

平成二十三年に、義父・小森武雄（昭和五十一年、京都市立本能小校長退職）が所有していた学校関係資料（四百一点）を京都市学校歴史博物館へ寄贈した。その際には寄贈に及ばず、手元に残った資料の中に京都市社会科教育研究會編『社会科学習京都地図』（昭和二十六年）や京都市社会科教育研究会編『新訂　社会科学習京都地図』低・中学年用（年代不詳）があった。

本稿では、戦後、昭和二十二年十月に発足した京都市社会科教育研究会[一]によって作成されてきた資料のうち、副読本『わたしたちの京都』（『京都のくらし』）について注目し、現在の所蔵実態や変遷について明らかにすることを目的とする。

寺本潔[二]は、戦後初の東京都港区の副読本の内容とともに港区の副読本が全国に先駆けての副読本である可能性についても提言している。前述の筆者所有の地図は昭和二十六年六月一日発行とあり、この発行日をどう判断するかという点があるにせよ、京都市の副読本作成も港区に遅れることのないタイミングであったことは推測できるところである。そもそも、京都市においては戦後、社会科教材資料や副読本の作成がどのように始まり、現在に至るのであろうか。地図にある発行年を見る限りでは、昭和二十六年には、京都市社会科教育研究会の資料作成の取組が始まっていたと考えられる。京都市における副読本が、全国的な新しい副読本作成の取組の中で嚆矢であった可能性も否定はできない。本稿では、現存する戦後の副読本を可能な限り追跡し、現在の資料の所蔵の実態を明らかにすることで、まずは散逸する資料の保存・収集についての課題を発信したいと考える。

また、一方で、平成二十三年をもって京都市立学校教員を退職した筆者にとって、紙媒体資料に溢れている現在の学校現場では、歴史的史料の保管という価値観に疎い点について、避け難い現状でもあるのは理解できる。躊躇なく古い紙資料の破棄・整理を行わねば、学校はたちまち大量の資料に埋もれる倉庫となってしまう。歴史的価値ある史料の破棄を食い止めるには、具体的な手立てが必要であることを痛感する所である。教育の変遷を追うことができる貴重な資料が、日々処分されてしまう危機的実態については、この価値を研究者と学校現場が共有しない限りは、歯止めをかける事はできない。結果として、いつのまにか破棄・処分され、気が付けば比較的新しい年度の資料さえ世の中から消えてなくなる実態さえ招きかねない。地域教材として生み出された副読本とその作成背景について、また今後の資料の継続保管の必要性の発信も含めて副読本変遷の実態を簡単に紹介し、今後の教材作成や史料の保管、教育史研究に寄与できればと思う

一 京都市社会科教育研究会『社研五十周年記念誌』（一九九八年三月）一四頁によると京都市社会科教育研究会（以下、京都社研）の発足は、昭和二十二年十月に創設されたとある。この部分の執筆担当者は、同冊子作成責任者の植松迪夫氏（元月輪校長）によると伴和一氏（元吉祥院校長・京都社研）と聞く。京都社研の発足日について、今のところ京都市行政文書など他の史料で確かめる事ができないのが残念である。

二 寺本潔「戦後最初の社会科地域副読本と思われる『わたくしたちの港区』の内容と価値」『論叢　玉川大学教育学部紀要』（二〇一一年号、二〇一二年）。

ところである[三]。

二、戦後の副読本

周知の通り、戦前の修身・地理・歴史に変わり、昭和二十二年の学習指導要領の制定により、戦後「社会科」として新しい教科が生まれた。この学習指導要領に準じる形で作成されたのが、副読本であり、中学年においては、地域教材がテーマとなるため、各々の行政区分によって独自に作成されることになった児童向けの資料集的性質をもつものである。内容は、地理教育の範疇である。学習指導要領に準拠するという大前提がある点と教育委員会の傘下にある組織で取り組まれた点が、いわゆる地域でつくりだされた「郷土資料」「郷土学習資料」や「こども風土記」などとは、性質が異なるものである。

◆調査方法

筆者所蔵の副読本（筆者の家族が所蔵していたもの）に加え、京都学・歴彩館と京都市学校歴史博物館（以下、学校歴博）へ寄贈された資料を現物で確かめ、撮影または複写をして情報を収集した。寄贈者（植松迪夫氏・家邊礼三氏）や、関連機関へのヒアリングも可能な限り行った。

各大学等の所蔵については、全国大学図書館所蔵検索を使用した。

三 和崎光太郎「学校所蔵史料の保存と活用―京都市を事例として―」『日本歴史学協会年報』（第三十一号、二〇一六年）では、学校資料の破棄・散逸や価値の共有について簡潔に言及している。筆者の副読本の事例も同じ側面を持つ。本稿は、簡易な資料紹介ではあるが、明日にでも破棄されそうな資料の価値を共有するために歩幅は極小であるが一歩を踏み出し、和崎論文の趣旨に追随したいと考える。

戦後初期（文末表の副読本①～⑨）指導者用から児童用へ

A…副読本1～3

内容は、地誌あるいは統計に近いものであり、文字も極めて小さく児童用ではない。故清水安氏（元社会科教育研究会会長）へのヒアリングでは「自然篇」については、記憶があり、序文執筆者の「長濱八郎先生（京都社会科教育研究會会長）を存じています」とはがきで返答していただいた。「自然篇」のはしがきには、戦後の新しい社会科という教科が「問題解決学習」を中心に据える事を踏まえ、そのよりどころとなる確かな資料を教師に届ける事を意図した内容が書かれている。京都社会科教育會とは、おそらく小中学校の教員で構成された組織ではなかろうか。一字違いだが、京都市社会科教育研究会とは別であると考える。

【私たちの京都】自然篇（昭23）

「自然篇」に続く二作目には、「先生方へ」と題し、京都社会科研究會長森田茂氏の序文がある。以下は、その序文である。

社会科教育資料集「私たちの京都」（運輸通信編）が出来上がりました。今後、残りの四編は、少なくとも月一回の目當てで出したいと思っています。全編六集が揃ってこそ、全體に有意義に活用していただけることですから、研究部としてもこの點精々努力しています。

しかし、続く「消費人口編」はあるものの、後の三冊は、今のところどこにも見当たらず、作成に至ったのかどうかがわからない。ヒアリングでお世話になった家邊礼三氏（昭和二年生まれ、昭和二十三～三十五年の京都

市立富有小勤務時代から放送教育に尽力）は、「戦後、紙が貴重な時期で、はたして誰が手にしてどのように使用したのか…、このような本は見たことがない」とのことであった。

B…「社会科学習京都地図」5

京都市社会科教育研究會編とされている地図は、昭和二十六年当時の京都市の景観がわかる資料でもあり、大変興味深い。筆者宅に所有する地図は、調べてみると『京都市を中心とした校外学習』昭和二十七年（非売品）の巻末に貼り付いた地図（定価三〇円）であることが判明した。『京都市を中心とした校外学習』四は、その巻頭挨拶にあるように、戦前の『京都を中心とせる校外学習』の精神を受け継ぎ、比較的変化が少ない部分はそのまま…とある。本書作成のために、最初の委員会が開かれたのが、昭和二十四年六月。以来、少なくとも全市各校社会科主任の調査や考えが反映した形で分担執筆により完成、同二十六年四月に発刊予定が、二十七年に遅れたとある。内容を見る限り、社会見学などに参考になる情報に溢れており、戦後の社会科指導を支える資料としては、教師にとってありがたい有用な資料であったと想像できる。副読本では、無いにしても、この時期に京都市社会科教育研究会が作成した「社会科」を支援する成果物であったと言えるので関連し挙げる事にした。

【社会科学習京都地図】（昭 27）

四 序文の後には、同書の編集や執筆などに携わった森田茂会長他十七名の各校の社会科主任の氏名が明記されている。副会長は樋口勝(仁和)とあり、『社研五十周年記念誌』一五二頁では、歴代京都社研会長・副会長一覧の中で同年の樋口の勤務校は光徳校とある。

C…副読本6～8

6の副読本が、京都市で初めての児童用の副読本（三・四年生用）である。単純に巻末の発刊年だけをたよりにすると、前述の、東京都港区の昭和二十八年六月二十五日発行に比して京都本は昭和二十七年十二月十日発刊で、港区本より早く発行されたと考えられる。実質的な発行日は、不明であるが、出版年のずれが一年以上もあるとは考えにくい。戦後、社会科の指導に向けて「桜田プラン」「川口プラン」「奈良プラン」…と全国各地で「問題解決学習」や「コアカリキュラム」がキーワードとなり指導実践が試みられた時期である。

【私たちの京都】（昭 28）

D…副読本9（昭和三十年：第五次改訂版）

副読本9のみが、「京都市社会科教育研究会編」ではなく、「京都市社会科学習研究会編」であり、三年から六年生用となっているが、発行者は、昭和二十八年、二十九年の副読本と同じ元陽社で、内容も類似しているので、表の中に挙げることとした。

戦後中期（表の副読本10～30）

三年用『京都のくらし』・四年用『わたしたちの京都』・地図

E…副読本10～13

この時期の特徴は、もくじの一つ目に「あそびときまり」という項があることである。地域教材をテーマに扱う資料にもかかわらず、珍しい内容で多少の違和感を覚えるが、身の回りのきまりについての内容の後は、

【私たちの京都】（昭 30）

【私たちの京都】（昭 31）

「わたしたちが知っておくとよい京都市のきまりをぬきがきしてみます。」と始まり、国際文化観光都市法、清掃法、消防法…市民憲章」と続いていく。この時期から発行所が永末書店となるが、これについては、後述することとする。

F…副読本14～23（15、16、17、18、21、22、23は欠号）

14～23の特徴は、奥付に発行年が記されておらず、内容（年表）から年代を推定するしか手立てがない中で、幸運なことに20については、筆者の夫が四年生時に使用したものであるので、年代を確定することができた。この年代の副読本の欠番が多く、昭和二十六年～昭和二十九生まれ、昭和三十二年～昭和三十四生まれの方が使用していた副読本が残っていれば寄贈いただきたいところである。

【わたしたちの京都】（昭 32 か）

G…副読本24～30（30は欠号）

24～30についても、奥付や表紙に年代の表記がなく、それに危機を感じた植松氏が、自分が所有している副読本について年代を識別できるようにシールを張り付け学校歴博へ寄贈された。

【わたしたちの京都】（昭 45）

【表紙について】

14（昭和三十五年）～30（昭和五十一年）については、三年用、四年用ともに表紙にサインが入っている。筆者が撮影した表紙画像を植松氏の記憶をたよりに分析、学校歴博の森学芸員にサインを照合していただくことができた。表紙の絵（四種）は、いずれも京都市立小学校教諭・画家・美術教育研究者という三つの顔を持つ西田秀雄氏画であることが判明した。西田氏は昭和二十九年には、京都市教育委員会美術功労賞を受賞している。学校歴博には、西田氏画の「しゃぼん玉」という作品が所蔵されている。

昭和五十年代、大判へ

H…副読本31～33

31以降は、白黒印刷から朱黒の二色印刷へ、また大きさもB5版からA四版へと変わり大変見やすくリニューアルになった。内容的にも、大きく見直しが図られ、地域のようすがわかるよりわかりやすい写真・グラフ・図表が工夫されることとなっていく。表紙のデザイン、内容が少しずつであるが、頻繁に変化するのもこの時期である。地域への積極的な取材無くしては、語れない記述に変化してきている。

【わたしたちの京都】（昭 52）

I…副読本34～45（41、43、44、45欠号）

34～あとは、表紙のデザインが変わるものの中身の大幅な変更はない。しかし、内容は毎年、丁寧な現地取材を繰り返し、新しい写真を撮影し、どんどん更新されていく。H・I期の現地取材の詳細については、後述する。

【わたしたちの京都】（昭 55）

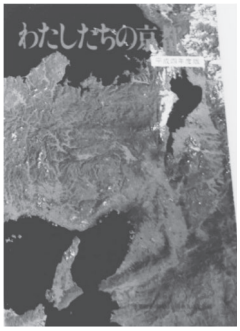
【わたしたちの京都】（昭 56）

平成四年～現在、大判・カラー・横書きへ

J…副読本46～55（55は欠号）

46～49は、横書きへ。前半二色刷り（朱黒）後半二色刷り（青黒）になった。さらに、50～55はカラー刷りになり、内容も表し方が大きく変化した。

【わたしたちの京都】（昭 61）



【わたしたちの京都】（平 4）

K…副読本56～64（58は欠号）

56～64は、まず副読本のタイトルが変更となる。第四次の学習指導要領改訂を受けて『わたしたちの京都三・四年』（上）・（下）となり、従来までの3年生用の『京都のくらし』という書名の使用はなくなった。内容も、変化が起こる。発行所が永末書店から（株）教材研究所に変わり、レイアウトも一新する。長く掲載された、単元「きょう土をひらく」で長く扱われていた巨椋池干拓は、姿を消す。

教材研究所は、修学旅行に関係する資料を扱う業者である。永末書店作成の副読本（平成十二年度版）が見本として持ち込まれ、平成十四年度より現在までが教材研究所からの発行となっている。植松氏によると、この過渡期あたりに大阪書籍（教科書会社）から地域読本を扱いたいという話が持ち込まれたようである。

【わたしたちの京都・下】（平 14）

L…副読本63～72

63～72では、中身の雰囲気は変わらないものの、内容は精選される。単元「きょう土をひらく」で長く扱われ続けた高瀬川はカットされることになった。レイアウトは、ますます技術が向上しており、見た目も非常にカラフルになった。同じ、「きょう土をひらく」の琵琶湖疏水の部分を見ると、大きな変更はないものの年度ごと写真や表が更新されている。

【わたしたちの京都・下】（平 23）

【永末書店について】

永末書店と副読本の関係は、昭和三十一年から平成十一年と実に四十三年間もの取引である。永末書店は、同社のホームページによると、永末英一（元衆議院議員）が松風陶歯株式会社の書籍部門を立ち上げ、昭和二十四年より歯科関係の書籍を出版とある。国立国会図書館蔵書検索で調べたところ、永末書店で検索をかけると六五八件で、そのほとんどが、歯科関係であり、副読本は他の書籍と比して分野違いの異例なパターンである。昭和四十一年度版などの欠号分を所有されている期待をこめて、現在の永末書店に電話で尋ねてみたが、会社には副読本の残部は無いとの事であった。四十年以上続いた関係ではあったが、価格的な面、印刷技術的な面等のことがあり、やむなく他社へ変更になっていったと聞く。

全体を通して

おもに四年生用の副読本を中心に、変遷の一覧（文末表）を作成した。昭和三十一年より、三年生用と四年生用が別れる。三年生用についても、学習指導要領の改訂に伴うモデルチェンジは同じ流れである。変遷一覧表に教育史年表や京都社研年譜を並列するだけでも、背景が立体化してくる

部分があるはずである。

本稿では、A～L期に分類することで、変遷の骨組みを分析した。例えば、琵琶湖疏水を題材に挙げた単元は、戦後から現在まで、全巻通して取り上げられている。各期の目次欄に（疏水○）として、ページ数を表してみた。本稿では、あくまでも外枠のみであり、内容的な変遷、分析には及んでいない。今後、様々な視点で考察していただく表一が資料となればと考える。

三、『京都のくらし』（三年用）単元「ちがった土地のくらし」―京都社研メンバーによる取材活動―

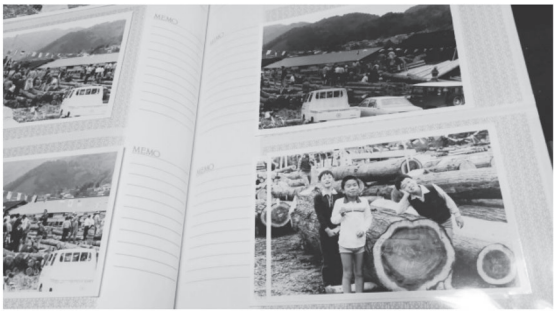
平成三〇年十一月、三十一年一月に、副読本に関するヒアリングのために植松氏宅に伺い、改めて昭和「五十二年度版」から「五十九年度版」にかけての現地取材について話を伺う。

この時期の副読本は、前述の区分ならH・Iにあたる。A四サイズの大判の副読本は、内容が一新した。学習指導要領の改訂に伴い、三年生に「県（都、道、府）内における自分たちの市（町・村）の地理的位置を確認させ、県（都、道、府）全体としての地形の特徴などに気付かせる」ことなどが新たな内容として導入されることになった。これを受け、従来の四年生が「日本の国内では、それぞれの土地の条件に応じた人々のくふうによって特色ある生活が営まれていること」を学習したのに加え、三年生向けに新たに単元「ちがった土地のくらし」を立ち上げることが必要となった。そのため、京都府内の地域の取材を通して子ども達の興味関心を引き出す副読本作成をめざすべく、京都社研メンバーによって、大がかりな取材活動が行われることとなった。京都府内からどの地域を選ぶのがよいかを決定するために、まずは、各自治体宛てに町勢要覧の送付を依頼し、府内の町勢要覧をすべて集め、様々な地域の特性を見渡した上で、海と山のある地域でかつ、地形・気候や産業などに特徴をもつ地域を選定することから始まった。候補地に絞り込んだ伊根と美山には、統計資料でそれぞれ事前に予備知識を

【雪の日に撮影した河岸段丘】

把握した上で役場や教育委員会とのやり取りをし、役場との打ち合わせをしてから計画を練り取材活動に入った。車二台、四～五人程度。役場や知人の紹介などで宿泊できるところを見つけたという。取材は美山・伊根それぞれに夏・冬二回。以下は、ヒアリングによる取材活動の様子である。

美山においては、役場から紹介を受け、地域で営む産業に注目し、なめこの瓶詰めや学校給食にゆかりのある美山牛乳、菜豆、鶴ヶ岡の木材チップ工場など地元の方に協力を得て、夏季・冬季ともに宿泊を伴う取材をしたという。取材には、例えば菜豆を京都市へトラックで送り出す出荷模様を撮影するなど時間調整の工夫が必要で、子ども達の興味関心を意識し、できるだけ市内とのつながりを想起することを基本とした。地元の方との交渉で、但馬牛（肉牛）の牛舎も見せてもらえたこともあった。また、美山の知井小学校（小畑先生）との交流から地域の様子をいきいきと表した地元の子ども達の作文も、副読本の参考にさせていただいたという。丹波高地は、西へ流れる由良川と南へ流れる大堰川の分水嶺の地域に当たる。地形も特徴的であり、典型的な河岸段丘の地形を撮影するために、雪が降り積もる季節にわざわざ出かけて写真撮影を行った。（雪の方が、白黒のコントラストがはっきりするため、よりわかりや



【地元の産業；林に着目した取材】

【役場で取集した資料・冊子】

すい写真が撮れる。現在は、圃場整理が進み、同地点は、道の駅などができて、景観は大きく変貌したという。）植松氏所蔵のアルバムには、新しい情報を得て撮影した各年度の写真資料が残されている。

海のくらしにおいては、特徴ある伊根の舟屋を取り上げるのが適当であろうということになった。今でこそ、舟屋関係資料をよく目にするようになったが、当時は役場資料も豊富ではなく、関係者との打ち合わせの中からさまざまな情報を得て、取材内容を絞り込んでいった。ブリ漁を取材するために、漁協関係者の協力を得て、早朝から漁船に乗りこんだ。副読本に掲載されたブリ漁の漁船に乗る人々をよく見ると、漁師ではなく、京都社研のメンバーが乗り込んでいるのがわかるそうである。また、毎年新しい情報を得ることで、海のマンションなど、より教材価値がありそうな写真を新たに撮影し、どんどんと内容を更新していった。海の仕事だけでなく、畑仕事にも注目しながら取材することも意識した。

美山・伊根のフィールド取材に於いて、多くの撮影を記録したことは、次の段階として、視聴覚教材の作成へと発展し、視聴覚研究会とも連携したビデオ番組作成などへつながっていった。植松氏所蔵の資料の中には、社研時代の指導案綴などに交じって、当時の旅行命令書の依頼文なども残っている。昭和五十六年八月十七日～十八日、宿泊は「前野旅館」とある。今のように、携帯やメールが使えるでもなく、何かと手間が

【早朝より京都社研メンバーが漁船に乗り込み取材】写真の一部は副読本に掲載

かかることであった。取材が済み、編集にも労力を要する。単元「ちがった土地のくらし」において、美山町と伊根町の国土地理院の航空写真と地形図、断面図を掲載している点は、知らない地域の地形を感覚的に理解できるように工夫がなされたと資料と言える。京都社研編集メンバーの力量とセンスに依拠していた部分が大きい。

四、おわりに

以上、本稿では、副読本『わたしの京都』の所蔵実態と変遷を明らかにしてきた。所蔵一覧表で、資料が欠けている部分をお持ちの方があれば、ぜひ、学校歴博へご相談いただきたい。さらに、副読本作成の背景や過程を知ることができる一次史料についても追跡したいところであるが、刊行された副読本の所在の有無を明らかにするので精一杯であった。また、三年生用の『京都のくらし』については、一覧表にできるところまでには及ばなかった。三年生用は、京都市地図ともセットになっており、こちらも大変興味深い。地図について一つ触れるとすれば、平成一二年度版の付図までは、京都社研の依頼により成立していた「吉田初三郎絵図」の掲載が、以降は途切れてしまったことなどがある。時代の変遷とともに、内容を更新しなくてはならない必要からいつまでもこの版を使用できないのは致し方ないことであるが、残念であった。「京都の子に吉田初三郎の鳥瞰図を」という願いが実っていた時代があった事実だけは簡単に紹介し、続きの機会があれば、報告させていただきたい。

今回紹介した副読本関係資料について、この周辺の史料として、本稿のはじめに挙げた、東京都港区における実践（桜田プラン）に相当するような京都の取り組みの資料が存在しても、おかしくは無いはずであり、可能性としては、第一回の近畿社会科教育研究会の大会会場になった有済校での取組の史料が残っておれば、戦後叫ばれた「問題解決学習」に対してどのような提案をしたのか、京都市における戦後の社会科教育の中身の部分

を探ることができたはずである。当時の有済校の資料が無いのが惜しまれる。さらに、その前年度に公開された日彰校については、昭和二十六年に京都市教育委員会より「問題解決学習」の研究指定を受け、昭和二十七年二月七日に発表を行っている。この実践については、中西仁「永田時雄・『西陣織』再考」『立命館産業社会論集』（第四十九巻第三号、二〇一三年）に詳細がある。社会科教育研究会の取り組みと日彰校での実践がどう結びつくかは、不明であるが、戦後初期の社会科教育について振り返る上で、まずは、こういった時期の史料が残されていることが必要とされるところである。しかし、反面、冒頭にもあげたように、教育現場では、年度末の整頓や異動によって個人の取組は破棄されるのが当然なところもあり、学校としての取り組みも夏季の職員作業日などで一掃される事多々ある。運良く残った資料だけをもって、ある時期の教育現場の傾向や一般性を言及しきることはできない。

さらに、今回解明することができなかったのは、戦後初期にこの副読本が、どのように活用されていたかという点である。活用実態を知る年配者へのインタビューは、急ぐところである。京都社研元会長の清水安先生には、何度かヒアリングをし、そのたびに丁寧にご教示いただいたが、戦後初期教育についての詳細な質問はできなかった。京都社研のリーダーであり且つ生き字引的存在であり、多くの資料を大切に持ち続けておられた清水先生だが、今年一月に他界された。戦前、戦後の教育どのように変遷したかを目の当たりにされた大先輩でもあり、様々な質問に対し、常に明確にお教えいただけただけに残念である。

副読本は、学習指導要領の改訂に伴い、大きく内容の見直しが図られながら作成され続けている。現在、二〇二〇年からは、新学習指導要領の元、リニューアル版の副読本がまさに登場するタイミングにある。現職の、社会科教育研究会の担当者は、在任校での勤務終了後も、遅くまで「副読本改正のための打ち合わせ」に忙殺の日々と聞く。同席する教材研究所の職員からも、同様の話を聞く。今も昔も変わらない、いわば京都社研の伝統的な実態である。働き方改革が叫ばれる昨今の中で、勤務時間内で打ち合わせの時間を生み出すことができないのが現状であり、現職の負担が大きいところである。

本稿を纏めるに当たり、植松迪夫先生には、何度もお宅を訪問しヒアリングをさせていただき、副読本作成のほかにも、様々な取組をされてきた証となる資料を見せていただいた。社会科教育関連図書はもちろんの事、ベーシックな部分を支える人文地理学関係の多くの文献とも深く関連を持たせながら豊かな地域教育を目指して取り組んでこられたことに強い感銘を受けた。とくに、雑誌『社会科教育』『地理教育』など様々な論考が所収されている資料を約四〇年収集されており、できれば、どこかで所蔵していただければとも思うところである。

また、京都学・歴彩館の松田万智子氏からは京都市放送教育研究会（放研）に所属しておられた家邊先生をご紹介いただき、同氏が京都学・歴彩館に副読本を寄贈される際に、昭和二十年代、三十年代の貴重な教育実践について聞かせていただくことができた。まだ、テレビが普及する以前の昭和三十一年の京都市立富有小学校での取組である。当時、同校は、立太子記念の小学生朝日（新聞社）の全国の児童作品募集（図画・書き方・作文）において全国第一位となり学校賞を受賞した。その記念品として受けたナショナルのテレビ（内部器械はオランダ製フィリップ社）を用い、教室内に大きなパラボラアンテナを設置し、「学校の授業で教育番組を視聴し、意見交流をする子どもたち」の様子を中継で放送するという珍しいエピソードも聴かせていただいた。まずは、教師が廊下を歩いてくるところの中継から始まる。授業は、五年生の社会科。授業の中で、児童は全国放送のテレビ番組（社会科教育番組、当日の放送タイトルは『陸蒸気』）を見て、その後意見を述べ合う。事前事後指導のすべてのシーンを二台のカメラを用いて全国へ生中継という、斬新な番組である。テレビを用いた授業の実践紹介のための取り組みであったそうである。（昭和三十二年一月二十一日午後一時～一時四十三分放送）テレビ番組を学校教育現場の中に持ち込むだ

けでも十分新しい時代に、子どもにとっての有用性を十分に議論し、テレビ番組を見せただけでは子どもの教育活動とは言えないという考えのもと、視聴のみに終わるのでなく、事前事後指導の必要性を追求し、全国にテレビの活用の仕方までを示した「京都」からの実践例の発信であった。戦後の、新しい教育観の中で、若い教師たちによる新しきことへの挑戦の話である。家邊氏宅には当時の教室写真等もあると聞く。詳細については、稿を改めて紹介させていただく事としたい。

我々が、目にしていない史料というのがまだまだ存在する可能性を感じるエピソードである。本稿では、社会科の副読本を取り上げたが、ヒアリングによる周辺エピソードからは、成果物に加え、そのプロセスこそが残りにくい事例を痛感するところであり、そういう性質のものも含めて、学校資料をどう継承していくかは要検討であると考える。

最後に、資料所蔵の収集・考察を巡って様々な方にご教示ご助言、ご協力いただいた。末筆ながらお礼申し上げたい。

【参考文献】

京都市社会科教育研究会『社研五十周年記念誌』一九九八年三月
京都市社会科教育研究会『京都市を中心とした校外学習』一九五二年
勅使河原君江「西田秀雄著『児童画指導の技術』資料研究―小学校教諭・画家・美術教育研究者の視点による教育実践―」『教育科学論集』第十五号、二〇一二年
寺本潔「戦後最初の社会科地域副読本と思われる『わたくしたちの港区』の内容と価値」『論叢　玉川大学教育学部紀要』二〇一一年度号、二〇一二年
中西仁「永田時雄・『西陣織』再考」『立命館産業社会論集』第四十九巻第三号、二〇一三年
野口学「戦後社会科の成立とその時期における社会科授業の実際」『今治明徳短期大学研究紀要』第二十九集、二〇〇五年
和崎光太郎「学校所蔵史料の保存と活用―京都市を事例として―」『日本歴史学協会年報』第三十一号、二〇一六年
学習指導要領データベース（国立教育政策研究所）https://www.nier.go.jp/guideline/
学習指導要領（昭二十二）（昭二十六）第一次改訂（昭三十三）第二次改訂（昭四十三）第三次改訂（昭五十二）第四次改訂（平一）第五次改訂（平十）第六次改訂（平二十）第七次改訂（平二十九）

【もくじ一覧】

※（疏水〇頁）とあるのは琵琶湖疏水についての記述ページ数

Cもくじ

比えい山と賀茂川
平安神宮
京都のうつりかわり
三条大橋
京都駅
疏水運河（疏水六頁）
西陣織と清水焼
京都のまちのようす
中央市場
京の三大祭
京都の開発
伏見港
これからの京都

全四十八ページ

Dもくじ

京都盆地
京都のうつりかわり（疏水五頁）
中央市場
交通
京都の産業
京都の祭りと
四季の行事
京都を築いた人々
京都の開発
これからの京都

全五十二ページ

E もくじ

あそびときまり
いろいろな
まちと京都
わたしたちの京都
交通の昔と今
京都の開発（疏水四頁）

全四十八ページ

F もくじ

わたしたちの京都
京都につながる
いろいろな町
京都の自然
大昔の京都
京都と水（疏水二頁）
交通の昔と今
のびゆく京都
ふろく

全五十二ページ

G もくじ

わたしたちの京都
京都につながる町や村
京都の自然
遠いむかしのころの京都
きょう土をひらく
交通のむかしと今
のびゆく京都（疏水五頁）
ふろく

全八十ページ

G2 もくじ

京都につながる町（全四節）
京都府の産業と人々のくらし（全六節）
ひらかれてきた京都（全五節）（疏水五頁）
交通のむかしと今

全八十ページ

H もくじ

むすびつきのつよい市町村（二節）
わたしたちの京都府（二節）
きょう土をひらく（五節）（疏水五頁）
交通のむかしと今（四節）

全八十ページ

I もくじ

わたしたちのくらしを
ささえるもの（二節）
わたしたちのくらしの
ねがい（二節）
きょうどをひらく（疏水五頁）
学習資料室
さまざまな土地のくらし（二節）

全八十ページ

J もくじ

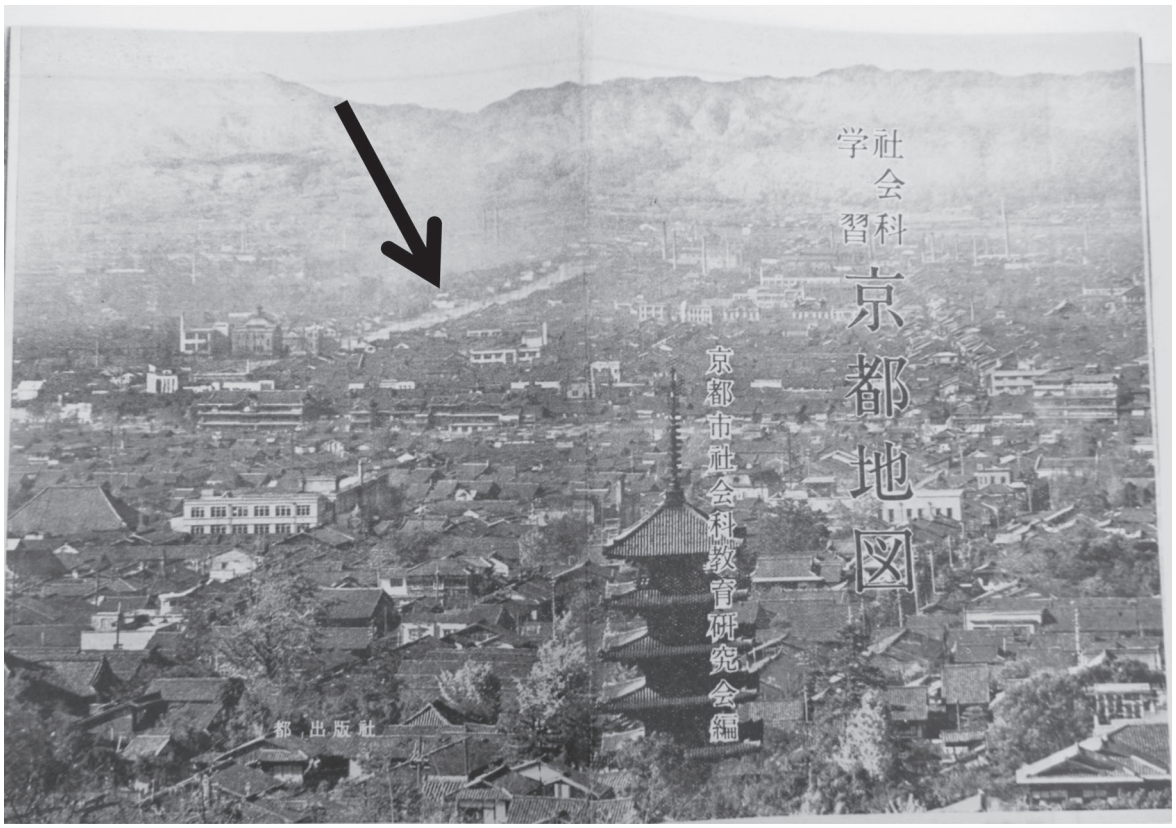
健康なくらしをささえる
安全なくらしを守る
わたしたちの京都府
学習資料室
きょう土を開く（疏水十頁）
国土のようすと
さまざまな土地のくらし

全八十六ページ

K もくじ

すみよいくらしをささえる
安全なくらしを守る
きょう土をひらく（疏水十三頁）
わたしたちの京都府

全八十ページ



『京都市を中心とした校外学習』（昭和 27 年、非売品、定価 30 円）の巻末に貼り付けられた地図。昭和 27 年当時の景観がわかる。矢印が示す道路は、建物疎開により道路拡幅された五条通、手前の五重塔は八坂の塔であると思われる。遠景に煙突が多数見える。

副読本『わたしたちの京都』の変遷　（資料5～72の編集は、京都市社会科教育研究会、通称「京都社研」）　　学習指導要領社会科編（昭22．5月）

		西暦	書名	発行所（発行者）・住所	取扱店・住所／【印刷所・住所】	編集者	定価	所蔵	表紙	ページ数	地図（●は別冊）	その他	
1	昭和23 9月1日	1948	私たちの京都 自然篇	都新聞社（山名正太郎） 京都市中京区河原町三条	【印刷所】鈴木直樹 （※日本寫眞印刷株式会社社長） 中京区壬生花井町3番地	京都 社會科教育研究會	25円	学校歴史 歴彩館		A5版 20p		【指導者用】 序文：小中学生に大いに活用	桜田プラン （昭22） 郵便ごっこ
2	昭和23 11月10日	1948	私たちの京都 交通運輸篇	都新聞社（山名正太郎） 京都市中京区河原町三条上	【印刷所】 日本寫眞印刷株式会社 中京区壬生花井町3番地	京都 社會科教育研究會	25円	歴彩館 京都教育大		A5版 28p 押印 「平尾」		【指導者用】 序文：残りの4編は月1回の目当てで出したい。	
3	昭和24 2月5日	1949	私たちの京都 消費人口篇	都新聞社（山名正太郎） 京都市中京区河原町三条上	【印刷所】 日本寫眞印刷株式会社 中京区壬生花井町3番地	京都 社會科教育研究會	25円	歴彩館		A5版 28p 押印 「平尾」		【指導者用】 はしがき無し	
4	昭和25	1950											
5	昭和26 6月1日	1951	（社会科学習京都地図）	都出版社 京都市中京区 三条通東洞院東入	【印刷所】 日本寫眞印刷株式会社	京都市 社会科教育研究会	30円	個人所蔵※1	写真①	たたんで B6	●吉田初三郎鳥瞰図		学習指導要領 改訂（昭26）
6	昭和27 12月10日	1952	私たちの京都	櫻井四郎 京都市上京区今出川西入ル	【印刷所】三和印刷有限会社 上京区室町通上立売下	京都市 社会科教育研究会	40円	学校歴史(太秦小) No1275		A5版 48p 13章	（折り込み地図無し）	【3･4年の児童用】	
7	昭和28 4月20日	1953	私たちの京都	元陽社（村上惠洋） 京都市上京区 御霊寺町南入ル	【印刷所】明星社 上京区寺町今出川上ル	京都市 社会科教育研究会	40円	学校歴史(柏原) 歴彩館		A5版 71p 14章	（折り込み地図無し）	【3･4年の児童用】	『わたしたちの港区』（昭28）東京
8	昭和29 表示なし	1954	私たちの京都 3･4年生用	村上惠洋 京都市上京区紫野今宮町16	【印刷所】村上惠洋 京都市上京区紫野今宮町16	京都市 社会科教育研究会	40円	歴彩館		A5版 49p ※2「29」	（折り込み地図無し）	【3･4年の児童用】	近畿社研 第1回京都大会 （昭29）
9	昭和30 5月30日 9月1日	1955	私たちの京都	元陽社（村上惠洋） 京都市上京区紫野今宮町16		京都市 社会科学習研究会 （植松） 京都市（判読不明） （歴彩館）	50円	学校歴史(植松) 歴彩館		A5版 70p 11章	（折り込み地図無し）	※2種あり 5月発行、9月発行 【3年～6年の児童用】 第5次改訂版	
10	昭和31 5月15日	1956	私たちの京都　四年用	第一図書出版会社（杉本邦雄） 京都市中京区 御池通烏丸東入	有限会社永末書店（発売所） 京都市東山区福稲上高松町5	京都市 社会科教育研究会	40円	歴彩館（家邊）		A5版 48p 5章	（折り込み地図無し）	【4年用】 表紙に「改訂社会科学習指導要領準拠」	
11	昭和32 4月1日	1957	私たちの京都　四年用	第一図書出版会社（杉本邦雄） 京都市中京区 御池通烏丸東入ル	有限会社永末書店（発売所） 京都市東山区福稲上高松町5	京都市 社会科教育研究会	40円	学校歴史(門真) 京都教育大学		A5版 48p 5章	（折り込み地図無し）	表紙に「改訂社会科学習指導要領準拠」 昭和32年改訂	
12	昭和33	1958											学習指導要領 第1次改訂 （昭33）
13	昭和34 4月15日	1959	私たちの京都　四年用	第一図書出版会社（杉本邦雄） 京都市右京区太秦多藪町34番	銀鈴房（発売所） 京都市左京区吉田中大路町31	京都市 社会科教育研究会	40円	学校歴史		A5版 48p 5章	（折り込み地図無し）	表紙に「改訂社会科学習指導要領準拠」 昭和34年改訂	
14	昭和35 表示なし	1960	わたしたちの京都　4年用	永末書店（永末英一） 京都市東山区 福稲上高松町11番地	銀鈴房（発売所） 京都市左京区関田町電停前	京都市 社会科教育研究会	50円	歴彩館		A5版 52p 7章	折り込み地図	年代無し 内容から昭32～36	
15	昭和36	1961											学習指導要領 第1次改訂実施
16	昭和37	1962											（昭36.4月）
17	昭和38	1963											
18	昭和39	1964											京都のよさ指導の手引
19	昭和40	1965	わたしたちの京都　4年用	永末書店（永末英一） 京都市東山区 福稲上高松町11番地		京都市 社会科教育研究会	55円	歴彩館		A5版		年代無し 内容から昭40～	
20	昭和41	1966	わたしたちの京都　4年用	永末書店（永末英一） 京都市東山区 福稲上高松町11番地		京都市 社会科教育研究会	55円	個人所蔵※1		A5版 52p 7章	折り込み地図 ●長観（鳥瞰図）		
21	昭和42	1967											学習指導要領
22	昭和43	1968											第2次改訂
23	昭和44	1969											（昭43）
24	昭和45	1970	わたしたちの京都　4	永末書店（永末英一） 京都市東山区 福稲上高松町11		京都市 社会科教育研究会	100円	学校歴史(植松)		A5版 80p 7章	折り込み地図	白黒	
25	昭和46	1971	わたしたちの京都　4	永末書店（永末英一） 京都市東山区 福稲上高松町11		京都市 社会科教育研究会		学校歴史(植松)		A5版 80p 7章	折り込み地図	白黒	学指導要領 第2次改訂実施 （昭46.4月）
26	昭和47	1972											
27	昭和48 4月	1973	わたしたちの京都　4	永末書店（永末英一） 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 京都市上京区土屋町通 上長者町下ル ミツボシ教材 京都市南区西九条南田町68	京都市小学校 社会科教育研究会	100円	学校歴史		A5版	折り込み地図	白黒	
28	昭和49 4月	1974	わたしたちの京都　4	永末書店（永末英一） 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	140円	学校歴史(植松)		A5版 80p 4章	（折り込み地図無し）	白黒	
29	昭和50 4月	1975	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	150円	歴彩館（家邊）		A5版 80p4章 押印「家邊蔵書」	（折り込み地図無し）	白黒	
30	昭和51	1976											
31	昭和52 4月	1977	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	380円	学校歴史(植松)		A4版 80p 4章 ※3昭52		たて 2色（黒朱）	学習指導要領 第3次改訂 （昭52）
32	昭和53 4月	1978	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	380円	学校歴史No1278		80p 4章 ※3開智	巻末付録 地図	たて 2色（黒朱） 裏「新学習指導要領移行改訂版」とあり	

		西暦	書名	発行所(発行者)・住所	取扱店・住所／【印刷所・住所】	編集者	定価	所蔵	表紙	ページ数	地図(●は別冊)	その他	
33	昭和54 4月	1979	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	380円	歴彩館(家邊) 学校歴史(聖母) No1279		80p 4章 ※3聖母		たて 2色(黒朱) 裏同上 押印;聖母短大図書館	
34	昭和55 4月	1980	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	360円	学校歴史(植松)		80p 3章 ※3昭55		たて 2色(黒朱)	学習指導要領 第3次改訂実施 (昭55.4月)
35	昭和56 4月	1981	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	360円	学校歴史No1282 学校歴史(植松)		80p 3章 ※2「56」		たて 2色(黒朱)	
36	昭和57 4月	1982	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	360円	歴彩館(家邊) 学校歴史		80p 3章 ※2「57」		たて 2色(黒朱)	
37	昭和58 4月	1983	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	380円	学校歴史No1283 か 学校歴史(植松)		80p 3章 ※2「58」		たて 2色(黒朱)	
38	昭和59 4月	1984	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 ミツボシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	380円	学校歴史No1285 ※1		80p 3章 ※2「59」		たて 2色(黒朱)	
39	昭和60 4月	1985	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 京都市上京区土屋町通 上長者町下ル マルビシ教材 京都市南区西九条西蔵王町2	京都市小学校 社会科教育研究会	380円	学校歴史No1284		80p 3章 ※2「60」		たて 2色(黒朱)	
40	昭和61 4月	1986	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 マルビシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	420円	歴彩館(家邊) 学校歴史(植松) ※1		80p 3章 ※2「61」		たて 2色(黒朱)	
41	昭和62	1987											
42	昭和63 4月	1988	わたしたちの京都　4	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 マルビシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会		学校歴史(見本)		80p 3章 ※2「63」		たて 2色(黒朱)	学習指導要領
43	平成1	1989											第4次改訂(平1)
44	平成2	1990											
45	平成3	1991											
46	平成4 4月	1992	わたしたちの京都	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 マルビシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	540円	歴彩館(家邊) 学校歴史(植松)		84p 5章 ※2「平成4」		横書き 前半2色(黒朱) 後半2色(黒青)	学習指導要領 第4次改訂実施 (平4. 4月)
47	平成5 4月	1993	わたしたちの京都	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 マルビシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	540円	学校歴史(植松)		84p 5章 ※2「平成5」		編集協力 京都市教育委員会	
48	平成6 4月	1994	わたしたちの京都	永末書店 京都市東山区 福稲上高松町11	宝教材株式会社 住所同上 マルビシ教材 住所同上	京都市小学校 社会科教育研究会	540円	学校歴史(植松)		82p 5章 ※2「平成6」		編集協力 京都市教育委員会	
49	平成7 4月	1995	わたしたちの京都	永末書店 京都市左京区 北白川別当町3	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	540円	学校歴史(植松) ※1		82p 5章 ※2「平成7」		編集協力 京都市教育委員会	
50	平成8 4月	1996	わたしたちの京都	永末書店 京都市左京区 北白川別当町3	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	640円	学校歴史(植松)		86p 5章 ※2「平成8」		カラー 編集協力 京都市教育委員会	
51	平成9 4月	1997	わたしたちの京都	永末書店 京都市左京区 北白川別当町3	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	650円	学校歴史(植松)		86p 5章 ※2「平成9」		編集協力 京都市教育委員会	
52	平成10 4月	1998	わたしたちの京都	永末書店 京都市左京区 北白川別当町3	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	650円	学校歴史(植松)		86p 5章 ※2「平成10」		編集協力 京都市教育委員会	学習指導要領 第5次改訂
53	平成11	1999	わたしたちの京都	永末書店 京都市左京区 北白川別当町3	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	650円	京都市右京 中央図書館 京都市醍醐図書館 ※		86p 5章 ※2「平成11」		編集協力 京都市教育委員会	
54	平成12 4月	2000	わたしたちの京都	永末書店 京都市左京区 北白川別当町3	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	650円	※1		86p 5章 ※2「平成12」		編集協力 京都市教育委員会	
55	平成13	2001											
56	平成14 4月	2002	わたしたちの京都3・4年 (下)	(株)教材研究所 京都市南区西九条鳥居口町 5	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	330円	歴彩館 ※1		80p 4章 ※2「平成14」		編集協力 京都市教育委員会	学習指導要領 第5次改訂実施 (平14. 4月)
57	平成15	2003	わたしたちの京都3・4年 (下)	(株)教材研究所 京都市南区西九条鳥居口町 5	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	345円 税込	※1		80p 4章 ※2「平成15」			
58	平成16	2004			表記無し								
59	平成17 4月	2005	わたしたちの京都3・4年 (下)	(株)教材研究所 京都市南区西九条鳥居口町 5	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	345円 税込	※1		80p 4章 ※2「平成17」		編集協力 京都市教育委員会	
60	平成18 4月	2006	わたしたちの京都3・4年 (下)	(株)教材研究所 京都市南区西九条鳥居口町 5	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	360円 税込	※1		82p 4章 ※2「平成18」		編集協力 京都市教育委員会	
61	平成19 4月	2007	わたしたちの京都3・4年 (下)	(株)教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	390円 税込	京都市立 中央図書館 ※1		84p 4章 ※2「平成19」		編集協力 京都市教育委員会	
62	平成20 4月	2008	わたしたちの京都3・4年 (下)	(株)教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	370円 税込	立命館大学 ※1		84p 4章 ※2「平成20」		編集協力 京都市教育委員会	学習指導要領 第6次改訂

		西暦	書名	発行所（発行者）・住所	取扱店・住所／【印刷所・住所】	編集者	定価	所蔵	表紙	ページ数	地図（●は別冊）	その他	
63	平成21 4月	2009	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	390円 税込	※1		84p 4章 ※2「平成21」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	
64	平成22 4月	2010	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	390円 税込	※1		84p 4章 ※2「平成22」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	
65	平成23 4月	2011	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	390円 税込	京都市醍醐 中央図書館 歴彩館 ※1		93p 4章 ※2「平成23」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	学習指導要領 第6次改訂実施 （平23. 4月）
66	平成24 4月	2012	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	390円 税込	立命館大学 ※1		92p 4章 ※2「平成24」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	
67	平成25 4月	2013	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	390円 税込	立命館大学 ※1		92p 4章 ※2「平成25」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	
68	平成26	2014	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	390円 税込	立命館大学 ※1		92p 4章 ※2「平成26」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	
69	平成27 4月	2015	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	401円 税込	立命館大学 ※1		92p 4章 ※2「平成27」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	
70	平成28	2016	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	401円 税込	※1				日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	
71	平成29	2017	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	401円 税込	京都教育大学 ※1		※2「平成29」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	学習指導要領 第7次改訂
72	平成30	2018	わたしたちの京都3・4年（下）	（株）教材研究所 京都市南区東九条河辺町21	表記無し	京都市小学校 社会科教育研究会	401円 税込	京都教育大学 ※1		※2「平成30」		日本白地図付録 編集協力 京都市教育委員会	

※1　個人（小森）所蔵

※2　表紙に「○年度版」と印刷

※3　表紙にシール貼り付け（寄贈者や担当者による）

学校歴史資料の目録と分類　補遺

和崎　光太郎

はじめに

本稿では、昨年度発行の本誌第六号に掲載された拙稿「学校歴史資料の目録と分類」[一]（以下、前稿）における表1及び表2を改訂し、加えてケーススタディを補足する。なお、本稿での歴史資料とは紙媒体に限らず、また将来的に歴史資料となり得る資料も含む（以下、資料と略記する）。学校資料とは、学校所蔵（だった）かどうかは問わず学校に関連するあらゆる資料を意味するのであり、個人からの寄贈も念頭に置かねばならない。

前稿が「あくまで覚書の段階」[二]であったのは、前稿が当館所蔵学校資料の目録作成がまだ半年しか試行されていない段階での到達地点をまとめたものだったからであり、本稿はその後約一年半（二〇一七年四月から二〇一八年九月まで）の間での改善内容を基にしている。

実際に作業にあたっているのは筆者ではなく、二〇一七年度は事務兼学芸員補佐の職員一名（週二～三日勤務）であり、二〇一八年度は事務兼学芸員補佐の職員一名（週二～三日勤務）、京都市教育委員会ＯＢの職員一名（週四日勤務）、京都市立学校元校長の職員二名（週四日勤務）である。これらの職員は当然ながら他の業務をこなしながら目録を作成している。この試行により、学校の教職員・生徒やＰＴＡ関係者、学区民、教育委員会の職員など、「専門家ではない者」が利用できる目録項目と分類方法が生み出されることを目指している。

一　目録項目の改訂

前稿表1の改訂箇所とその意図は、以下の通りである（改訂した表は本稿文末に掲載）。

・「1　資料番号」の「年代順番号」を、「識別番号」に改めた。理由は、年代順に番号を付けると、資料の受入れや新発見などによって資料番号が変わるからである。

・「2　関連学校」の記入において、資料の年代が特定できない場合に学校名を記入できないという事態に対応するため、説明文を加筆した（二行目からの一文）。

・「7　寄贈者」および「8　寄贈受入年月」は、一つの項目になっていたものを二つに分割した。理由は、エクセルなどの表計算ソフトに入力したデータは、並べ替えや他のソフトに読み込ませる際にできるだけ単純化された文字列であることが望ましいので、一つのセルに複数の情報を持たせないようにするためである。

他に若干の変更を行ったが、すべて目録の制作者と利用者にとって「見やすく・使いやすく」するためである。前稿でも触れたが、この目録と分類はあくまで事務職員や学校教員による目録作成を念頭においたものであ

一　和崎光太郎「学校歴史資料の目録と分類」『京都市学校歴史博物館研究紀要』（第六号、二〇一七年五月、三五―四三頁、京都市学校歴史博物館のホームページ http://kyo-gakurehaku.jp/about/dayori/bulletin/bulletin_vol.6.pdf で閲覧可）。

二　前掲「学校歴史資料の目録と分類」三六頁。

り、見やすさ・使いやすさこそが生命線である。緻密に過ぎても、粗雑に過ぎてもならない。

二　分類カテゴリー（分類番号）の改訂

前稿表2の改訂箇所とその意図は、以下の通りである（改訂した表は本稿文末に掲載）。

・凡例、および「０４　生徒会・同窓会・ＰＴＡ・部活動」の下位項目すべての末尾における「発行物・製作物」を「関係」に改めた。調査を進める中で、これらの団体が受け取った資料（賞状など）、つまりこれらの団体が発行または製作したものではない資料も例外扱いできないほどの数が現存することがわかり、それらも同じグルーピングで登録するためである。

・「０５０１　作文」を、「０５０１　作文（文集を含む）」と改めた。というのも、児童・生徒の文集は、「０００１　その他製本されたもの」と「０５０１　作文」のどちらにも分類可能であるが、一般向けに公開される性質の資料ではないことや、資料にアクセスするアーカイブズ利用者の目的などを考えて、後者に統一して分類することとしたからである。

加えて、訂正箇所ではないが追記しておいた方が良いと思われるケーススタディなどを、以下に記しておく。

・一つの資料には複数の分類されうるカテゴリーがあることを前提としなければならない。例えば、文部省発行の教科別指導書は、「０００７　教科別研修資料など」にも、「０００８　学習指導要領」にも分類され得るし、「０６０７　その他教材教具・指導関係」にも分類されよう[三]。大切なのは、複数の分類選択肢がある中で「どこに分類」するかで悩みすぎないことであり、とりあえず「どこかに分類」して資料番号をつけることである。というのも、すべての学校資料に対応する厳格な分類基準を設けることは不可能であるし、可能になったとしてもその分類は緻密すぎて実用性がない。そもそも紙媒体の目録は今日では資料にアクセスするためのツールとしては消えつつあり（他の意義はあるがここでは割愛する）、予算の都合などで検索システムが導入されなくても表計算ソフト（エクセルなど）で作成された目録を検索するなどして資料にアクセスするケースを想定する方が現実的である。ともかく、学校資料の置かれた状況（散逸・廃棄の加速化）を考えれば、学校資料を扱う上で最も大切なのは、まずは先述の「どこかに分類」するなどしてとにかく目録を作成することである。資料番号をつけるということは、資料に戸籍を与えるのと同様の意味があり、資料番号をつければその資料の散逸・廃棄の可能性は一気に低くなる。

・教科書会社が発行する教科書準拠の教員用指導書は、教科書として分類し、「０００２」、「０００３」、「０００４」のいずれかに含める。教科書と指導書はそれぞれ異なった性格を持つ資料だが、分類が細かくなりすぎることを避け、かつ目録の利用者が必要な資料にアクセスしやすい分類にするためには、これが最善であろう。

・学校の用地・外構などに関する見積書・納品書・請求書などは、厳密には建築関係とは言えないが、建築史の視点から興味を持つ利用者が多いことから、「０２０３　建築関係・校舎図面」に分類する。

・前稿では地方自治体・国が発行して学校が受け取った資料（賞状など）は、どの分類も当てはまらず「その他」にならざるを得ない状況だった。しかし、このような性格の資料のために分類を増やすと際限が無くな

三　京都市学校歴史博物館では資料の性格を重視して、「０００８　学習指導要領」に分類することを申し合わせている。

る。よって、地方自治体・国の発行物・配布物などのうち、他に分類し得ない資料は「０２０４　学校運営関係」に分類することとした。

・周年記念事業など、運営主体が実行委員会のイベントに関する資料は、実行委員会の内実を記念誌の内容などで把握してどこが主体になっているかを判断して分類する。例えば、学校が主体の場合は「０２０４　学校運営関係」に、学区が主体の場合は「０２０７　学区関係」に分類する。主体がよくわからない場合は早めにけりをつけてどこかに分類する。

・戦前は小学校だったが戦後に新制中学校に転用された学校には、戦後の周年記念事業の際に作成されたアルバムなどに小学校時代のものが混ざっているケースが多々ある。その場合は中学校で分類し、付記にその旨を記入する。

・地方自治体など学校以外が発行主体で個人宛ての表彰状などは、学校発行ではないのだが、学校を通して渡されたということに学校資料としての意味があるので、「０３０３　証書・賞状」に分類する。

・校章などが記されたバッジ類は、制服など服飾に付けるものは「０８０１　服飾・鞄・靴など」に、それ以外は発行主体や記された内容で分類する。例えば、学区単位での教育会（学区で資金を積み立てて教具などを学校に寄付する会）が発行した記念バッジは、「０２０７　学区関係」に分類する[四]。

・音源のみのデータ（カセットテープなど）は、音源の内容や貼られたラベルなどで判断して分類する。再生できず内容を確認できない場合は「０８０７　その他」に分類する。

四　大分類「０２」は文書であるが、ここに言う文書とは紙媒体でなければならない、というわけではない。文書としての性格があれば物理的に何であれ、それは文書である。例えば岡山県立記録資料館（アーカイブズ施設）では、紙に書かれたもの以外も文書として積極的に展示されている。

おわりに

前稿で述べたように、筆者は学校資料の分類を、収集・整理のための分類と、活用のための分類に分けて考えている。前稿及び本稿は、あくまで前者（収集・整理のための分類）である。後者（活用のための分類）については、別稿[五]を参照されたい。また、学校資料がこれまでどのように論じられてきて、どのような課題が残されているのかについては、前稿では概略を述べるにとどまっていた。この点についても不十分ではあるが、すでに別稿[六]で論じている。

繰り返しになるが、前稿及び本稿では、前述した「専門家ではない者」が学校資料の目録を作成するにあたっての手がかりとなることを目標としている。ただし、この目録項目・分類方法は京都市学校歴史博物館での試行に基づいたものにすぎない。つまり、分類の判断に困る場合や、そもそも「これが何であるか」がわからない場合は、いざとなったら筆者（教育史専攻の学芸員）に相談できる環境での試行段階を脱してはいないのである。この点において、この目録項目と分類方法は汎用性の実証実験がまだ不十分であるとの誹りは免れ得ない。今後の課題としたい。

五　和崎光太郎「学校資料の収集・保存・活用」『広文協通信』（第三二号、二〇一七年一一月、四―一三頁、広島県市町公文書等保存活用連絡協議会ホームページ https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki_file/monjokan/hirobunkyo/kaihou32.pdf で閲覧可）。

六　和崎光太郎「「学校の文化資源」研究序説――学校史料論の総括と展望――」『洛北史学』（第二〇号、二〇一八年六月、二七―四五頁）。

1，資料番号

「関連学校番号 - 分類番号 - 識別番号」で構成される 9 桁の番号。

「関連学校番号」…3 桁。各自治体で学校ごとに定める。関連学校が無い場合は 000 とする。

「分類番号」…4 桁。別表２「分類カテゴリー（分類番号）」で定めた通りとする。

「識別番号」…3 桁。順不同。数字に意味を持たない ID のようなもの。

2，関連学校

関連学校番号の校名。ただし，閉校時または入力時の校名に統一（例：京都市開智尋常小学校の資料は，京都市立開智小学校の資料として登録）。旧制から新制への移行，学校統廃合などで名称が大きく変わる場合などは，登録者の判断で必要に応じて付記に正式校名を入力。小学校と，高等小学校・実業補習学校・青年学校・新制中学校は，別の学校として扱うが，小学校（尋常科）と高等小学校（高等科）が未分離の資料は小学校に分類する（国民学校の初等科・高等科も同様）。

「京都市立」は「市立」,「京都府立」は「府立」,「小学校」は「小」,「中学校」は「中」,「高等学校」は「高校」，と略す。

3，大分類

分類番号の上 2 桁。

4，小分類

分類番号の下 2 桁。

5，制作年または発行年月

一般刊行書籍は発行年月を記入。検定教科書は検定年月，国定教科書は検査年月（どちらも発行年は「9，付記」に記入）を記入。必要に応じて，末尾に「以降」「(推定)」等と記す。

明治 5 年末までは旧暦(和暦),明治 6 年以降は西暦で記入。月日も明治 5 年末までは旧暦(和暦)。

年度しかわからない場合，年度を記入し末尾に「年度」と記入。

文書等で，その内容に「いつからいつまで」という期間がある場合はその期間を「1910-20 年」等と記入。

6，資料名（製作者／著者／発行元）

書籍等は著者と発行元を記入（例えば,「近代日本の道徳教育（和崎光太郎／京都市学校歴史博物館)」と記入)。簿冊の場合は簿冊名で記入し，バラしてある場合などそれぞれの資料名を記す必要がある場合は,「資料名（簿冊名)」で記入。ただし,簿冊は表紙と中身が一致する保証が無いので,中身を確認し，必要に応じて表紙とは異なる名称を付けること。

7，寄贈者

8，寄贈受入年月

西暦で統一。

9，付記

上記以外に必要なことを記入（キーワード検索用，迷ったらとにかく記入)。戦後検定教科書の教科書番号はここに記入。

10，画像

資料名と資料が一致しないケースを想定し，画像を見れば一致するようにしておくための写真。写真のファイル名を資料番号にしておき，複数枚あるときは末尾に a，b…とつける。

表１　目録項目

凡例：前２桁が大分類，後２桁が小分類。便宜上，主に戦後の公称である園児･児童･生徒を「生徒」と総称する。

00　書籍類
0001　学校記念誌・学区誌類
0002　戦後検定教科書
0003　国定期の教科書（1904-1948）
0004　国定期以前の教科書（-1903）
0005　副読本
0006　参考書・問題集
0007　教科別研修資料など
0008　学習指導要領
0009　一般書籍
0010　その他製本されたもの

01　写真・映像
0101　卒業アルバム
0102　記念発行のアルバム・絵葉書など
0103　その他アルバム類
0104　その他写真
0105　映像史料
0106　フィルム・ガラス乾板など

02　文書
0201　学校沿革史
0202　日誌類
0203　建築関係・校舎図面
0204　学校運営関係
0205　学籍簿（指導要録）・指導記録類
0206　地図（学区地図等を含む）
0207　学区関係（青年団・夜学会など含む）
0208　その他文書

03　学校発行物・配布物
0301　学校発行物
0302　通知表
0303　証書・賞状
0304　運動会・発表会・修学旅行関係
0305　その他生徒向け配布物
0306　保護者向け配布物

04　生徒会・同窓会・PTA・部活動
0401　生徒会関係
0402　同窓会関係
0403　PTA 関係
0404 部活動関係

05　生徒作品
0501　作文（文集を含む）
0502　絵画
0503　習字
0504　ノート・プリント
0505　テスト
0506　日記
0507　その他生徒作品

06　教材教具・指導関係
0601　理科
0602　社会
0603　音楽
0604　算数・数学
0605　保健体育
0606　幼児教育
0607　その他教材教具・指導関係

07　建築・鋳造物
0701　瓦
0702　像
0703　その他建築・鋳造物

08　その他
0801　服飾・鞄・靴など
0802　考古
0803　民俗
0804　給食
0805　備品類
0806　手紙類
0807　その他

表２　分類カテゴリー（分類番号）

西山翠嶂作品のひとつの特徴について
――古画学習の観点から――

森　光彦

はじめに

西山翠嶂（一八七九―一九五八）は、明治後期に頭角を現し、戦後まで京都画壇の中心として活躍した画家である。翠嶂は師の竹内栖鳳（一八六四―一九四二）の後、近代京都画壇の主流を受け継いだ画家として、これまで重要視されてきた。翠嶂は師であり義父でもあった栖鳳を大いに尊敬し、栖鳳の作画姿勢に倣ったと考えられている[一]。

翠嶂について、これまでの言説でよく見られるのは、写生を熱心に行い、現実的な表現を得意としたという評価である。例えば神崎憲一は、翠嶂の芸術表現について、「写生的現実味を基調」とすることを指摘している[二]。ただし、こうした評価の前提には、師である竹内栖鳳の存在がある。そもそも、日本画において対象を写生することを重要視し、その写生を作品に大きく反映することで現実に即した表現を達成したといわれるのは翠嶂の師である竹内栖鳳である。すなわち、翠嶂は、栖鳳の特徴であり、作品の代名詞ともなっている「写生」の表現を、継承した人物として注目されてきたといえる。

しかし一方で、翠嶂はその著書において、栖鳳を評してこのように語っている。すなわち「あの独自の筆力は、無から有が出来たのではない。写生からでもないし、旧来の師法を学んだことからでもない。このやうなたゆみなきたくましい努力（筆者注：古画の模写及び縮図のこと）の深さに因由している。」と[三]。ここにおいて、翠嶂は栖鳳の写生にまして、特に古画を学習していたことについて評価していることが分かる。翠嶂作品が、栖鳳の作画姿勢を学んで作られたものだとすれば、翠嶂作品には、古画学習の要素が反映されているのではないだろうか。

本稿では、古画学習という観点から検討することで、改めて翠嶂作品のひとつの特徴を明らかにしたい。さらに、なぜ翠嶂が古画学習を特に重要視したのかについても考察してみたい。

そのために、以下の手続きを取りたい。第一章では翠嶂の著作『太朴無法』の記述を振り返り、翠嶂が古画学習を特に重要視していたことを指摘する。第二章では、翠嶂の代表作四点を取り上げて古画と比較しながら検討し、その特徴を明らかにする。第三章では、翠嶂が古画学習を重要視した理由を明らかにするため、近代京都画壇において、古画学習がいかに重要な理念であったかを簡単に振り返りたい。

一　森下麻衣子「西山翠嶂の画業に関する一考察」『西山翠嶂―知られざる京都画壇の巨匠―』平成三〇年、海の見える杜美術館

二　神崎憲一『京都に於ける日本画史』京都精版印刷、昭和四年、一七〇頁

三　西山翠嶂『太朴無法』大丸出版、昭和二五年、一一七頁

第一章　『太朴無法』の記述

翠嶂の絵画観を最もよく表しているのは、昭和二五年に出版された画論『太朴無法』である。翠嶂がまとまった画論書を出版したのはこの一冊のみである。昭和二五年といえば、師である栖鳳が亡くなった後、終戦を迎え、翠嶂は七〇歳となり画壇の大御所となっていた時期で、その内容は、自身の過去の制作を振り返りながら、絵画にとって重要なことは何かということについて語っている。まさに全画業を通しての絵画観が凝縮されたものであるといえるが、これまでその内容についてはあまり注目されてこなかった。

『太朴無法』は自身の作品解説や、師である栖鳳の思い出など、多くのトピックに分かれて構成されるが、いくつかのトピックの中で何度も登場する考え方がある。それは、翠嶂が「不易流行」という言葉で語る事柄である[四]。「不易」すなわち変わらないこと、「流行」すなわち変わっていくことの両方が絵画にとって重要であるということである。温故知新という言葉でも言い換えることができようが、本書では新規性を求めるだけではなく、伝統を見直すことが大事だということが、言葉を変えながら繰り返し語られる。例えば、「画法に於ける写実（革新的な出発）といふことも、深い伝統に対する認識があつてこそ、本当の意味の写実が出来る」[五]といった言葉に見て取ることができよう。そして、その「不易流行」を達成したのが、師である栖鳳だとして評価するのである。栖鳳については、まず「（栖鳳は）日本画の新しい創造の世界を夢想し、その気鋭に富んだ情熱家」[六]であるとし、「明日の日本画に新しい形式を求めるには、先づ古典の眞精神を理解するにある。と、この意味から（栖鳳は）古名画の研究、模写が始められた」[七]とする。このように翠嶂は栖鳳を語る際はまず「独創性」「新規性」を評価し、それを獲得する為の重要なプロセスが「古画学習」であったと指摘している。また、画家たるものは栖鳳を見習うべきで、「古典から出て古典を越える、敢然としてこれをなすものが、明日への精進の路であることを知らねばならぬ」[八]と語り、自身もまた、「若き先生は、まだ古典の研究熱の熾んな時代であつたから、その心懸けを私達へも頻りに奨励された。私が古名画の研究として、或る期間模写などに没頭したことは、精神的にも技巧的にも少なからぬ糧となつたことで、今日に於ても切実にありがたく感じられるのである。」[九]として、古画学習の姿勢を栖鳳から学んだと語っている。

では、翠嶂がいう、古画への認識とは、いかにして彼の作品に反映されるのか。

第二章　翠嶂作品と古画

翠嶂がどのように古画学習を作品に反映させているか、文展や帝展の出品作である代表作四点を通して見てみたい。

まず、翠嶂の初期代表作で、明治四〇年の第一回文展に出品された《廣寒宮》（京都市美術館）【図1】について。広寒宮とは、中国の伝説に登場する月の宮殿で、仙女であった嫦娥が住むところとされた。翠嶂以前にこの画題が描かれた例は管見されず、この時期の画家にとって広寒宮の定まった図像イメージはあまりなかったものと思われるが、能の演目「羽衣」においては、天女が舞を行う場所として登場する。翠嶂の《廣寒宮》ではこの天女の舞に焦点を当て、群像として表現した。その際に翠嶂が参考にし

四　松尾芭蕉がかつて弟子たちに草した十訓十論の中に登場する言葉として紹介されている。
五　前掲注三、二五頁
六　同、一一五頁
七　同、一一五頁
八　同、一二〇頁
九　同、一一七―一一八頁

たと思われるのが、中国の仕女図である。例えば中国明時代に描かれた伝仇英《仕女図巻》（大和文華館）【図2】の中には、宮廷の庭に仕女が集い、踊りに興じている姿が描かれている。長い袖をなびかせながら舞う人物の図様や、木々に囲まれた舞台の設定が類似している。このような女性の群像図の図様を参考にして、《廣寒宮》を制作したと考えられる。中国の伝説を描くために、中国の古典絵画を参考にした可能性から、当時も知られていた作品を挙げてみたのだが、そもそも近世以前の日本絵画には、これに類似した女性群像はあまり見られない。すなわち、登場人物は数人の女性のみで、木が立ち並ぶ屋外に遊んでおり、舞い踊る人物を中心にして、それぞれの人物の優雅な立居振舞を描いている。こうした、楽しげでどこか魅惑的な女性群像というものをテーマにした絵画は珍しく、そうした理由から、仕女図のような作品がイメージソースである可能性が指摘できるのである。次に、大正六年の第一一回文展に出品され、特選となった《短夜》（兵庫県立美術館）【図3】を見てみたい。これは、夜が明けかかった暁景の中、人々が乗り合わせる三十石船が淀城畔を行く様子を描いている。この作品については、翠嶂自身が古画との関係を以下のように語っている。曰く、「出発点はやはり錦絵で、あの抒情詩的の気持を表現したいつもりで思ひついた」「構図については、（中略）大体の人物は名所図会のものなどによつて纏めました」と[一〇]。実際にどのような錦絵を参考にしたかについては、すでに飯尾由貴子氏が論考「西山翠嶂《短夜》について」[一一]の中で、歌川広重の《京都名所之内　淀川》【図4】との関連を指摘しており、船を画面手前に大きく描く構図や、船内の人物のポーズの類似が分かっている。昭和四年、第一〇回帝展に出品され、雨が降る湖面に橋の架かる風景を描いた《乍晴乍蔭》（耕三寺博物館）もまた、江戸時代の名所絵との関係が指摘できよう。広重の《近江八景のうち　瀬田夕照》【図5】と比べてみると、画面右上から左下へと横断するように大きくかかる橋や、大きく描かれた湖面、その向こうに見える遠景など、画面構成が類似している。昭和一四年に制作され、第三回の新文展に出品された《馬》（京都市美術館）【図6】では、画面いっぱいに堂々とした駿馬を描いている。前脚で踏ん張って後ろ脚を勢いよく上げ、口は開き、荒い呼吸が今にも聞こえそうで、目は見開きこちらに視線を向けている。非常に躍動的な絵である。この作品は、中国の唐時代に描かれた韓幹の《照夜白図》（メトロポリタン美術館）【図7】を参考にして描かれたと思われる。柱につながれているという図様、目つき、躍動的なポーズが共通している。また、すらっとした馬の体躯や、美しい斑点の肌模様、流麗になびくたてがみやしっぽの表現は、李公麟《五馬図巻》（東京国立博物館）【図8】などを参考にしているとも考えられる。

以上のように、翠嶂は、展覧会出品作のような代表作の制作において、意識的に古画を参考にし、その図様をあからさまに踏襲している。鑑賞者に参考元の古画を想起させるような、いわばオマージュともいうべきかたちで取り入れているといえる。一方で翠嶂は古画をむやみに模倣したというわけではないようで、そこへ自己表現を加味して翠嶂の独自性も表現しようとしている部分も看取できる。例えば、《廣寒宮》では女性たちの顔に細かく胡粉を塗り、立体感を表そうとしている。また眉の形や目線の方向などを一人一人細かく変化をつけることによって、表情を豊かに表している。あるいは《短夜》についても、おおまかなポーズは広重を踏襲しながら、船頭の骨格や筋肉は丁寧に、正確に描かれており、現実に即した表現を志向している。このように、翠嶂は写生に基づき、表情や姿態を細かく写実的に描くことによって、対象を生き生きと、現実的に表現している。すなわち、翠嶂は古画の図様を踏襲しながら、そこへ近代的な写実性を加味していたといえ、古画を当世風に解釈することが主眼であったといえるだろう。では、翠嶂がこのように、古画学習を重要視した理由はどこにあるのだろうか。次章では、京都画壇にとって古画学習というものが特別な理念

一〇　黒田天外『一家一彩録』国書刊行会、大正九年
一一　飯尾由貴子「西山翠嶂《短夜》について」『兵庫県立美術館紀要』五号、兵庫県立美術館、平成二三年

であったことを振り返りたい。

第三章　近代京都画壇にとっての古画学習

近代京都画壇において、古画学習が特に意識されるようになるのは、翠嶂の大師匠（師の師）に当たる、明治前中期の画家幸野楳嶺（一八四四―一八九五）の時代である。明治一〇年代になると、楳嶺は師の塩川文麟のあとを継ぎ、四条派を代表する画家として京都画壇の中心として活動していく。明治一一（一八七八）年に同世代の画家、久保田米僊らとともに京都府知事の槇村正直に京都府画学校の設立を建議し、同一五年には第一回内国絵画共進会にて、京都画壇の代表として審査員をつとめるなどした。その後楳嶺が京都画壇の中心として行ったひときわ大きな事業が、同二三年の京都美術協会設立である。京都美術協会は、東京にすでにあった日本美術協会に対抗するように作られた美術団体である。流派を問わず京都画壇の画家がこぞって参加し、また書画のみならず、工芸の分野、さらに政財界からも有志が集まった。会頭には府知事の北垣國道を招き、まさに京都画壇そのものといっても良い大規模のものであった。その機関誌『京都美術雑誌』の創刊号には、協会設立の理念が掲載されている。ここには会の発起人である楳嶺の考えがよく表れている。その一部を見てみると、

古人崇拝ノ弊ヲ去リ流派分立ノ風ヲ除キ徒ニ依様画胡廬ノ習ヲ学ハズ巧ニ換骨脱胎ノ妙ヲ用ヒ新機軸ヲ出スモ怪詭ニ陥ラズ古意匠ヲ取リテ僻陋ニ失セズ以テ古人ニ愧ヂザルヲ務ムヘシ[一二]

とある。すなわち、無批判に伝統の流派様式を受け入れ、流派に閉じこもるのでなく、古画を意識的に学び、それを踏まえて、巧みに新機軸の日本画を生み出すことを理念として掲げている。こうした理念は、楳嶺以前に京都画壇を支配していた、流派様式中心の制作態度に対するものであった。明治初期の京都画壇では、江戸時代から続く流派が支配的であった。一般的に画家は、円山派、四条派というように画の流派に系統づけられ、その中で師弟が形成する塾（社中）に所属した。画家を目指す者は概していずれかの流派の塾に所属し、師に画法を学び、師に認められて画家となった。学ぶのは主に流派特有の様式であり、結果として流派の画風を継承するのが一般的であった。そこでは古画を研究し、自身の作品に反映させて新規の表現を開拓することも珍しかった。いわゆる粉本主義と批判される事態になっていたともいえる。楳嶺はこのような流派様式のみに固執したシステムにおいては、新しい絵画表現は生まれないと考えたのである。実はこの考え方には、楳嶺が受けたフェノロサの講義が影響を与えている。美術協会設立から4年前の、明治一九（一八八六）年六月、お雇い外国人として来日し、文部省に所属して東洋美術の調査、研究を行っていたアーネスト・フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa,1853―1908）が京都で講演を行った。京都の画家二、三〇人が招かれ、文部省官僚であった岡倉天心が通訳をつとめた。東京で日本画家たちと共に新しい表現を探究していたフェノロサは、東京の進歩に比べて、京都の画家が依然として流派にこだわり、日本画を停滞させていると指摘した。そして、京都は、古来より美術が多く残る豊かな文化的土壌であるから、ぜひこれを発展させ、新時代にふさわしい躍進を期待するといって鼓舞した[一三]。楳嶺はこの講演に参加しており、とても感動したと思われる。楳嶺はこの講演の前からフェノロサの考え方を支持していた。明治一六（一八八三）年、楳嶺はフェノロサの画論『美術真説』を五〇部あまり購入し、自身の画塾や研究会などで周囲の画家に配ったと

一二　京都美術協会編『京都美術雑誌』第一号、文求堂、一頁

一三「洛東円山中村楼における演説」山口静一『フェノロサ美術論集』中央公論美術出版、昭和三六年

いう[一四]。この『美術真説』では、雪舟や狩野派、円山応挙、また絵巻の名作に触れながら、古典を学び、新機軸を打ち出すことの大切さを説いている[一五]。それを踏まえて行われた中村楼での講演でのフェノロサの主張も、流派にこだわらない新機軸の必要、そのための古典学習の奨励という内容であった。楳嶺はこの講演の三か月後の明治一九年九月に京都青年絵画研究会を設立している。これは流派を超えて有志の画家が参加することができる研究会で、明らかにフェノロサの鼓舞に応えたものといえよう。この動きが、同二三年の京都美術協会結成へとつながっていく。以上から、楳嶺にとって古画学習とは、新しい日本画を模索するために欠かせない、重要な理念となっていった。ゆえに、京都美術協会の主となる活動は、古美術と新しい美術を同時に研究する展覧会を開催することとなった。『京都美術雑誌』の第一号には、研究対象として室町時代の狩野元信筆、大徳寺大仙院障壁画の四季花鳥図や、同じく室町時代の矢田地蔵縁起絵巻（現・根津美術館蔵）が掲載されている。また、楳嶺は弟子に古画模写を推奨し、栖鳳や菊池芳文、谷口香嶠ら弟子たちは、積極的に古画模写を行った。この結果、楳嶺以降では、古画を通して様々な画法を選択的に学習し、各画家が独自に解釈することによって、流派にこだわらない、近代的な個性が育まれていったといえるだろう。

楳嶺とともに、明治一九年のフェノロサ講演を聞いていたのが、弟子であった竹内栖鳳である。栖鳳は、師と同様に、フェノロサの考えに大いに感化された。講演後には栖鳳を中心とした若手画家らで『美術真説』の研究会を立ち上げた。これが発展し、明治二一（一八八八）年に若手中心の煥美協会が結成された[一六]。煥美協会は、諸流派が情報交換し、切磋琢磨するという理念をもった会であった。栖鳳はその後、楳嶺のあとに自分が京都画壇の中心になっていくことになるが、流派様式からの脱却という理念は、栖鳳の制作活動のもとになっていることが明らかである。その画業の初期には、熱心に古画学習を行い[一七]、その後栖鳳は写生を大きく作品に反映させることによって、栖鳳流の自己表現を完成させていくこととなる。このように、近代京都画壇にとって古画学習とは、楳嶺から栖鳳へ受け継がれてきた重要な理念であったことがわかる。

翠嶂は、このように近代京都画壇で継承されてきた古画学習の理念を、楳嶺、栖鳳と続く京都画壇の担い手として、意識的に受け継ごうとしていたのではないだろうか。翠嶂は師の独創的な芸術を育んだ出来事について、特にフェノロサの講演を挙げてこう語っている。

> あたかもその頃、フェノロサ、岡倉覚三の両氏が京都に来て、東京画壇人の現代の情勢から、明日への日本画壇の飛躍する道を説くところがあった。先生（筆者注：栖鳳）にとつては、固より日本画の新しい創造の世界を夢想し、その気鋭に富んだ情熱家として、これは大きな刺激であった。枯渇した日本画道を画道の本体に引きもどさなければならぬといふ堅い決意のもとに、天才栖鳳は雄々しく立ち上がったのである[一八]

翠嶂は、古画学習というものが、栖鳳にとって、また京都画壇にとって新しい創造のために重要な理念であることを理解していたと考えられる。そ

一四　岡崎麻美「幸野楳嶺の絵画理念「十格」とフェノロサ『美術真説』――その作画と教育」『美術史』一五七冊、美術史学会、平成一六年

一五　フェノロサ述『美術真説』竜池会、明治一五年

一六　以下の論考に詳しい。植田彩芳子「煥美協会考――フェノロサ講演の余波――」『京都画壇の明治』京都市学校歴史博物館、平成三〇年

一七　明治二〇年代の栖鳳の作品を見てみると、古画学習の跡がよく表れている。《円山応挙（保津川図屏風）模写》（明治二一年、奈良県立美術館蔵）や《雪舟（山水長巻）模写》（明治二三年、京都市美術館蔵）、芸阿弥や相阿弥の模写などが残っている。

一八　前掲注3、一一五頁

の上で、自身の絵画制作にその要素を大きく反映させた。この姿勢は、近代京都画壇を自身が担っていくという、決意のようにも感じられるだろう。

おわりに

以上より、翠嶂は著書において古画学習の重要性を主張しており、それこそが師の栖鳳から学んだことであるとしている。それを踏まえ、改めて翠嶂の作品を検討した結果、翠嶂は文展出品作など自身の代表作において、古画の図様を下敷きにして、描かれた人物や動物の表情、筋肉などには近代的な写実表現を加味していることが指摘できる。それが翠嶂作品の特徴である。それは翠嶂にとって、古画へのオマージュともいうことができるだろう。翠嶂がこのように古画学習を重要視した理由は、明治前中期において、楳嶺と栖鳳が流派様式の因習からの脱局を目指す際に掲げたのが、古画学習の必要であったからである。翠嶂の、栖鳳への理解は、こうした理念の継承によく表れているといえるのではないだろうか。

※すべての引用文について、旧字体を新字体に直した。

引用図版出典（複写転載した）

図1、3、5、7　海の見える杜美術館編『西山翠嶂―知られざる画壇の巨匠―』海の見える杜美術館、平成三〇年

図2　大和文華館編『大和文華館所蔵品図版目録8　絵画・書籍　中国・朝鮮編』大和文華館、昭和六三年

団体見学の実績と課題
――平成二十九年度を振り返って――

野中 哲也　菅野 泰敏

はじめに

開館二十周年まであと一年となった平成二十九年度の年間来館者は二万二千七百人となり、二十六年度から続く二万人超えを継続達成することができた。平成三〇年は明治一五〇年、そして三十一年が番組小学校設立百五十周年という年にあたって、より一層の来館者獲得は、京都市が小学校発祥の地として、地域ぐるみの学校づくり・学校運営に力を尽くしてきたことを広く市民に広め、これからの学校教育を学校・保護者・地域、行政、そして何よりも子どもたちと共に一体となって推進していく基盤となるものである。

今後の更なる利用者の拡大を目指して、館全体としての来館者の現状を踏まえた上で、団体見学についての現状と課題、そして今後に向けての方策を考えたい。

団体見学の実績と内訳

来館者には一般来館以外に、本館で企画する各種講演会や事業・企画への参加者、そして事前予約による団体来館者がある。

団体来館には、大きく学校・教育関係団体とそれ以外の団体がある。学校関係でも児童・生徒・学生などのグループと、教職員・ＰＴＡなどの教育関係団体に分けられる。これ以外の一般の団体としては、生涯学習関係、福祉関係、その他には行政視察や旅行社の斡旋等による見学団体などがある。

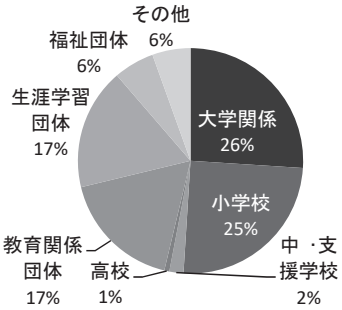
この団体見学来館者数は前年度、過去最高を記録していたが、二十九年度は三十％あまりの減少という結果であった。平成二十九年度の団体見学の実績の内訳は表やグラフのとおりである。

平成二十八年度　団体入館者総数　二千百二十二名（六十七団体）
平成二十九年度　団体入館者総数　千四百九十二名（五十九団体）

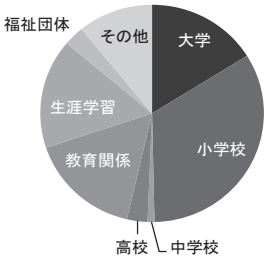
平成 29 年度団体見学者内訳

		H29	H28	前年比較
学校教育関係		1063	1483	-420
	大学関係	388	342	46
	小学校	373	712	-339
	中・支援学校	30	21	9
	高校	11	63	-52
	教育関係団体	261	345	-84
一般団体		429	639	-210
	生涯学習団体	260	345	-85
	福祉団体	87	63	24
	その他	82	231	-149
合　　計		1492	2122	-630

平成 29 年度団体見学者内訳



平成 28 年度団体見学者内訳



団体見学の動向と対応の実際

団体見学者数の減少の要因は事前申し込み団体が減ったからである。前年度の六十七団体から五十九団体へと総数で八団体減少した。学校教育関係では、前年度は１００名、２００名規模で来館していた小学校を含む四小学校の来館がなかったことが大きく影響している。

また一般団体では、一昨年度からの積極的な働きかけで前年度に一挙に増大した京都市内の学区地域団体（地域女性会）の来館がゼロとなったことも、来館者数減少の大きな要因となった。

本館開館以来、団体見学のメインとなるのはやはり小学校である。減少したとはいえ、二十九年度は五校が来館した。いずれも以前から継続的に来館していただいている学校で、小学校三年生の社会科「むかしを伝えるもの」の学習の一環や「総合的な学習の時間」の取組として90分から2時間の設定で当館を利用していただいている。

実際には、まず京都の番組小学校設立の概略を説明し、本館での見学・学習のポイントを提示する。展示物の見学にあたっては、常時設置されている各展示物の小学生向け「解説カード」や団体見学用の「博物館たんけんノート」を使って展示物調べを行っている。さらに、「昔の学校とは、勉強とは」を体験し新たな気づき・興味を持ってもらうために、石盤・石筆体験と旧仮名遣い学習などの学習プログラムを準備して対応している。なお、学校ではないが、児童館が館外行事として小学生を連れてきた際にも、学校同様のプログラムで対応した。

小学校に比べ、中学・高校生は、残念ながら京都市内からの来館は少ないのが現状で、他府県からの修学旅行の班別行動などで、本館をコースに入れて来館する生徒が中心である。（二十九年度は府外からの2校であった。）

大学関係では、在京の大学に加えて、埼玉・東京から岡山・広島の範囲で教育関係の担当教員がゼミ学生や、各大学在籍の留学生（タイ・中国・インドネシアなど）を引率して、延べ二〇大学が来館した。これらの大学のいくつかは、本館学芸員との個人的つながりによるものである。

さらに、教育関係という意味では、韓国や中国、インドネシアからの教育関係者の視察団なども計三団体　六十八人を受け入れた。日本の近代教育・義務教育制度のあゆみを学べる場として、京都を訪問する外国人にも認知されてきているのではないか。

一般団体では、教育行政や地方議員などの視察のほかに、デイサービス施設などの福祉施設の利用者や、地域生涯学習団体のシニア層が訪れて、懐かしの昔話に花を咲かせることもよくみられる。一般旅行会社の京都観光に組み込まれる形での、本館の利用もあった。これら一般団体にも、本館映像ホールで施設の概要や設立の目的、京都における近代教育成立のあらましなどを説明し、各展示コーナーに同行して必要に応じて展示物に関する説明なども行っている。

今後の取組にむけて

団体見学に関しては、学校の行事や総合的な学習の一環といった学習活動に位置づけられると数年間は継続的に来館していただける場合が多く、そうした学校を拡大していくことが重要となってくる。しかし、新たな学校の開拓は、その学校の年間行事や学習計画そのものの見直しを伴い、余裕のない現在の学校にとっては、なかなか困難なことであろう。そのためにも、現在毎年来館していただいている学校での評価、その学校からの情報発信が大きな力となるであろう。

一般団体にとっては参加メンバーが変わらない限り、毎年連続での来館はなかなか難しいと考える。その意味で、学校のＰＴＡのように、ほぼ毎

年役員改選などでメンバー変更が行われる団体に対しての広報を強め、社会見学などの候補地として毎年検討対象として挙げてもらえるようにしていきたい。また、企画展・特別展の内容やテーマによって、対象団体を焦点化して働きかけを強めることも大切である。

おわりに

本館には、ほぼ毎日のように外国人個人観光客がふらっと訪れる。三〇年度になり、以前から課題となっていた英語・中国語、・韓国語による外国人向け音声ガイドと解説資料が作成・配備された。常設展示室の展示コーナーごとに展示物を解説するものである。今後も、来館者のニーズに応じた多様な対応ができるように工夫を続けたいと考えている。

執筆者紹介（掲載順）

小林　丈広　同志社大学文学部教授

小森　千賀子　琵琶湖疏水アカデミー　代表

和崎　光太郎　当館学芸員

森　光彦　当館学芸員

菅野　泰敏　当館博物館主事

野中　哲也　当館博物館主事

京都市学校歴史博物館

研究紀要　第七号

平成三十（二〇一八）年　十二月三十一日　発行

編集・発行　京都市学校歴史博物館
京都市下京区御幸町通仏光寺下る
橘町四三七番地

印刷　株式会社　田中プリント